
神さま『魔法』が大変です！

長野崎結奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神さま『魔法』が大変です！

【Z-ONE】

Z05395

【作者名】

長野崎結奈

【あらすじ】

誰もが暮らすこの世界で一つの戦争が起っていた。それはたった一つの「神」を手に入れるため魔法使い達による戦争だ。

そこへある高校生が立ち向かうことになる。

<第一章> 魔法と戦乱と本

この世には人々が争い合つ「戦争」というものがある。これは兵器によつて行われる。だが、もしその戦争が「魔法」によつて行われたら…

その戦争は誰も知らず始まり誰にも知られることなく終わる。200年に1度この世の魔法使い達がたつた1つの神を田指して戦いう。魔法使い達は互いに仲間を組み、自らが生まれつきにもたらされた火・水・葉・雷・地のうち1つ属性を駆使して傷つけ合い、殺し合ひ。そして勝ち残つたたつた一集団の君主だけが神を有する。

神を有した者は全てを自らの物として自由に操り、思いのままにできる。

もう始まるつているのだ。

その神を手に入れたいと。

その力を全てを手に入れたいと。

誰にも知られない戦争が、この世の隠れた魔法使い達によつて。

知らない世界、知る世界

「どこの世界

「なるほど、お前はただ者ではないな…火変種属性を使つ魔法使いつてわけが。面白い、かかってきな！」

ある男がどこかで呟いた。

「ああ、そうだな。覚悟を決める。お前の魔法人生に終止符を打たせてやる。」

ある男がどこかで呟いた。

「どこの世界、どこの話…どこでもない。あるのはこの世と今だけだ。

ならば、もし魔法があるとしたらこの世の今に限るであらへ。

そして魔法によつてすべてが我が物かのように操ることができるようになつたとき、その存在を人々は何というか。

その存在はすべてを有し、思い通りになる「神」という称号が与えられる。

その一つの存在…「神」をもしも手にすることができるなら必ずやそれを手にしようとする者達が現れ、一つを手に入れるために争う。そしてそれはやがて「戦争」になるのだらう。

「戦争」を勝ち残った一人の勇者は「神」となり、すべてを有する。

* * *

キークーン、カーコーン

「はい、では数学の授業を終わります。それでは皆さん立つて…えー…礼。」

どこの町、どこかの高校。毎日、気がつけば授業が始まり、授業が終わる。

そしてひたすら帰宅時間になると起きるときを学生の誰もが待ち遠しくしているだろう。

「ここはただのビリでもある自称進学校の高校「天端高校」だ。

どのクラスも4月にクラス換えをしたのだが皆すっかり打ち解け合
い休み時間は昨年以上に騒がしくなったようだ。すでに5月にさし
かかり、この晴れた暖かな天気は休み時間とは打って変わって授業
中にはより一層と生徒を睡魔へと陥らせる。

そしてこの高校22HRの教室にて苦手な数学の授業が終わる事を
誰よりも切実な思いで願っていたのは大咲綺迫オオサキ・キハクであった。彼がふと
気が付けば授業の終了チャイムが鳴っていた。

「キハク、お前寝てただろ？」

大咲綺迫の席に友人らしき人物が歩き寄ってきた。

「ああ、数学の授業は寝ることを前提に俺は受けてるからな。」

キハクは自慢げに答えた。大咲綺迫は16歳高校2年、身体付きは
華奢で顔付きは若干少女混じりで長髪。前髪は目下までかかるとこ
ろまである。

周囲からは女性のみならず男性にもモテるなどとからかわれる事が
多いが恋愛経験は薄い。

そんな彼に今話しかけているのは友人、アイカワ・ヨシナリ
相川義就だ。

「余裕だな……1番前の席で……。これでいて俺より数学ができるから
腹が立つ。」

「それは相川が数学ビリだからだろ?」

「その通り～！」

「自信持つて言うな。毎回宿題を他人のを写しているからそうなるんだよ。さっきも川崎から英語のワーク借りてただろ？そういうのが積み重なつて春休み課題テストで英語12点とつたり、数学3点とつたりするんだ。いいか？」

「あーはいはいはい。お説教は親と先生から毎日聞いているので結構！その上ダチからも説教じや、俺はやっていけねーぜ。」

「そつか、なら今日の生物の宿題お前に貸す予定だったが取り止めにしておくか？」

「そつそれは……！」

「明日は、やつてこいよ。仮の顔も三度まで。最もお前の場合はこれで何十回目だ？とにかく次の休み時間までには返せ。」

「はっはい！大咲大佐！！

キハクは渋々と生物のノートを相川に受け渡した。

しかしキハクもキハクで、授業中よく寝てしまつたため正直、相川には言つ面がないことは承知の上だ。ただそれ以上に相川は成績がよろしくない。

「ねえ、聞いた？また放火事件あつたみたいだよ。これで何件目？」

「うん、怖いよね。しかも昨日は三軒全焼だつて。本当警察何やってるんだろうね。」

キハクは席に着いたまま退屈しのぎに自然と耳に入つてくる女子たちの会話を渋々聞いていた。相川が何か話しかけている様子だが彼に聞く気はない。

「おい、キハク聞いてるか？」

キハクは面倒くさげに「ああ」と答えた。

「その顔は絶対聞いてないな…お前つてやつはー。」

「よくわかつたな。」

「それはこの相川様だからな。つてそ、じゅねーよ。」

「そういえば昨日、何？火事あつたんだって？」

「無視！？無視なのか！？キハク！！」

相川は身振り手振りで自分の存在をキハクに示した。だがこの行動も別の人物の登場によつてまた無視されることになった。

「そ、うなんだよ。俺の家の目の前だつたから本当にびっくりだしたぜ。」

相川の隣にはもう大学生と言えるほど大人びいた、といふかおじさんくさい長身の青年が立つっていた。

「おお、矢口。いつの間に……」

「ああ？ そ、うか？ さつきからいたんだが……。しかしキハクも大変だつたよな。先週はあれだろ、確かお前のマンションの近くで火事だろ？」

「うん、でも小規模だつたし…」

連続放火事件。

これは約1ヶ月前からこの町内で起こっている。出火原因、時間帯等から人による犯行と見られ、警察側は同一犯として捜査を開始している。しかし各犯行現場にはこれといった繋がりはなく、犯人の意図は何一つ分からぬ。その上目撃情報といった手掛かりは無いので、正直警察側も手に負えない状態である。

彼ら学生にとってはどうでもいい話なのだが、ここまで深刻化すると多少なりとも心配になるが、この放火事件による負傷者、死亡者の報告は今のところ無くその点では安心できた。

そんなニュースなど特に関心がない相川は会話に入れずムシャクシヤしい。

だが、これを主題とする会話もあと一ヶ月もすれば犯人が捕まり気が付けばなくなり消え去つていることであろう。

どんな話題の話であつたとしてもいつかは忘れ去られ新たな話題が持ち込まれ人々はそれに訳もなく熱中し勝手に盛り上がる。

ただ、この会話が学生にとってこの上ない楽しみであり高校生活のひと時を過ごすための鍵でもある。

高校生活、いわゆる会話、学問、遊び…これがキハクにとっての今すべきことであるのだろう。

そう、キハクが普通の高校生なら…

彼は普通ではない。

すべき事は遊び…違う、学問…違う。彼は今は尽くさねばならない。主人に、主人を護るために、自分の役割を果たすために：

彼がこの高校に来たのもそのためだ。

主人。キハクはこのことを考えると酷く面倒に思え気がつけば寝てしまう。主人にすべきこと、尽くすこと、これらはキハクが幼少時から母親にひたすら言われ続けたことだった。彼はその話を聞く度に眠くなつたものだつた。幼少時の彼にとつては難しい内容ばかりで、この上ない退屈であったのであろう。

そんな事実もすっかり忘れ去られたようにキハクは会話に夢中でいた。

その時、普段絶対に入らない声がキハク達の元へ入ってきた。

「矢口君…だけ？その放火事件の話、聞かせてくれないかな？」

そこにいたのは去年キハクと同じクラスだつた女子生徒である、杞^{キユ}憂桜^{ウ・サクラ}だ。

「キハク、ちょっと矢口君借りるね」

キハクの了解を得ないまま、いつもの可愛げぶりをバラまきながら矢口の腕を引っ張り連れ去つていった。

「あつあれは、杞憂桜たん…。」

相川は漠然と立ち尽くして、そして言った。

「……お前の事、大咲君とも呼ばずキハクって呼んだよな…。なん
でそんな！」

相川は半分憎らしく半分羨ましげに怒鳴りつけた。普段から表情豊
かな相川だが、今はすごい。

「いや、去年いろいろと機会があつて…仲良くなつたんだよな。」

その表情に圧倒されながらキハクは言った。少々怯えながら…

「つたぐ、お前は…！」

サクラはこのクラス内でなかなかの美人である。その美人がキハクに親しげな様子を見せたことが相川には腹立たしいようだ。

しかし正直な所、親しくなつたのではない。親しくする必要性があったのだ。

キハクの第6感は彼女から出る得体のしれない何かを感じていたのだ。

その何かは…

キハクにも分からぬ。

連続放火事件

休み時間の最中、サクラが矢口から何を聞き出されたかは不明であるが、その後妙に彼女の様子がざわめいているようにキハクは感じていた。

キハクにとつては連続放火事件など、正直どうでもいい話ではあったがどうやらそういう訳にはいかなそつだと、彼は思った。

放課後を迎える生徒が友人達と集まり帰りの支度をしているときには、気がつけばサクラの姿はもうなかつた。

「これは、いや、確信は無いが：あり得るかもな。」

キハクは机の上に肩掛けのバックを置き教科書をバック内に突っ込みながら一人で呟いた。

「おい、何が確信だ？」

「うわつ！ いたのか！」

キハクの目の前には23HRの竹野霸流タケノ・ハルがポケットに手を突っ込み立っていた。

「いちや、わいーかよ。おい、早く帰るぞ。」

ハルはとても17歳とは思えない低い声で唸るように言った。目つきは鋭く見られている側は常に睨まれている気分だ。だが、本人には悪気はない。

「あつ、竹野君だ。バイバイ」

キハクとはほとんど面識のないクラスメイトの女子がハルに手を振つて通り過ぎた。ハルはただ、「ああ」と答えただけだった。

ハルのこのクールというか渋いというか何とも言えないキャラが何故だか女子生徒に人気になつていて。

キハクとハルは中学生時代からの友人でキハクのマンションの近くにハルの家があるため、いつも2人セットの登下校である。

ただ、ハルに至つては見かけによらず、父親が有名企業の社長であるためキハクとの生活環境は全く異なる。キハクはマンション一人暮らしだが、ハルは母親と妹と暮らしあ3階建ての高級住宅に住み、彼の財布には福沢諭吉しか入っていない。ついには家にメイドがいる始末である。

「待たせた。ハル。よし、帰ろつ。」

「ああ。」

2人は教室を出て、階段を下り外へ出た。

「そういえばハル、放火事件について何か知らない？」

「ああん？あの連続放火のヤツか？」

「そうだよ。」

「あー、知らん。」

「知らいのか…」

「あー、ただ…とても人がやつたとは思えないほどの完璧さみたい
だぜ。」

「完璧？」

「ああ、指紋とか出火に使ったものとか何一つなく、その上目撃情
報、ゼロだとよ。」

「なるほどな……」

「しかしどうしだ？ そのニュースがなんかあつたか？」

「いや、なんでもない。ただちょっと気になつただけ。」

キハクにとつてこの事件は完璧であつはほしくなつた。ほんのわずかでもいいから証拠があつてほしかつた。証拠があるならばそれはただの人間一人が行つた、ただの放火事件で幕を閉じる。しかし証拠がない完璧な放火事件となると、そういうただの事件ではなくなる。なぜか？

人は完璧ではないと言われるが、まさにその通りである。どんなに気を配つていっても何かしらの失態、事件でいえば証拠を残す。失態、証拠があるからこそ人間が行う行動であり、人間らしさなのだ。つまりはそれらがないものなら人間らしくないとということになる。人間らしくない、完璧な行動をとれる生命が存在するとすればそれは何か？ 幽霊か、地球外生命体か、または新種の生物か… そんなものは所詮空想にすぎない。だがキハクにはその何かに心当たりがある。普通に日々を過ごしていく民間人たちは決して気づかれることのない彼が知る優一の存在を。

もしその存在が放火事件の答えで、サクラが動いたとするならば…

彼は。

「完璧…か。」

キハクの呟きにハルは彼の表情を見るなり

「なんだ？お前、なんかあったのか？」

と言った。

そのハルの心配そうな顔が目に入ったのが、キハクはとっさに「いや、なんでもない。」と言った。

この場でこの事件に関して考えても仕方ないのでキハクはいつも通りの会話を持ち出すなりして普段通り帰宅した。

一方キハクが気にかけたサクラは…

「ふーむ、矢口君が言つ話によるとやっぱり手掛けりが少なすぎるなあ。気が付いたら火がついていた、誰一人犯人を見ていない、今までの放火事件同様今のところ手がかりなし。これは、まさかのまさかね…」

サクラは周囲の田を気にする」となく独り言をぼやきながら帰宅していた。

「うーん、やっぱり確かめるしかない！」

「せつぐつりああー。」

「さやひー。」

サクラにこきなり何者かが飛びつき抱きついた。

「ちょ、モミーびっくりしたじゃない。」

「だつて、サクラがいたんだもんっ」

「いても抱きつかない、てか離れて。」

抱きついた少女はモミといふ名前である。まだ制服姿の少女は「えー」と言いながら渋々サクラから離れた。

少女・城之崎茂美キノザキ・モミはサクラの友人で肩に軽く触れるほどのショートヘアの持ち主で少々まだ幼さを残した顔つきだ。彼女はキハク、サクラのクラスメイトである。

男子からは人気があるにはあるが彼女は男に興味はないようだ。しかし不思議なことに必要以上に女に抱きつく。

「サクラは今日一人で帰ってるけどしだの？珍しいね。」

「うん、ちょっと調べ事で…ね。」

「ふーん、大変だなあ。」

「まあね、あれれ？モハソビツしだの？」

「今日は塾なんだあ。」

「塾ねえ…」苦勞様

「ありがと、そういうば…サクラ～。」

「何？」

「最近放火事件の件数多くなつてない？」

「え、なんで？」

「えー、だつて先月は一週間に一度の割合だつたけど先週は月曜日、金曜日に起こつた二軒、今週は昨日のを含め一軒。でも今日は木曜。来週まであと三日。三軒目とか起こつてもおかしくないんじやない？でもけが人、今のところゼロだからよかつたね。早く捕まんないかな…犯人。」

突然のモミの言葉にサクラは驚愕した。

サクラが驚くのも無理ない。まさにその通りなのだ。三週間前火災が一つ、二週間前小規模な火災が一つ。先週は一軒、サクラの自宅周辺にて火災が発生。そして今週昨夜の大規模火災を含め一軒。その上りが人はどういう訳か誰一人いない。

「ねえ、私、急用思い出したから先行くね？」

「えっ？ うううん。じゃあね、サクラ。」

サクラは戸惑っていたモミなど一切気にせず走り去つていった。サクラは思った。

あれが始まつてから半年。隠し通してきたけどそろそろ来てもおかしくない。

と。サクラはまるで誰から逃げるよつに走り自分の家を目指した。

舞う桜、舞う炎

深夜二時。すっかり静まりかえったこの町の住宅街を全身白い衣装をした20代後半ほどの男がタバコを口に銜えながらゆっくりと行くあてもないまま歩きさ迷っていた。短髪で黒色の髪型だが、その顔つきは明らかに日本人ではない。

「さーて、今日はどこを燃やすか。」

不気味な笑みを浮かべるその男の左手には小刀と思われるものが握られていた。

「よーし。ここの家でいいだろ。」

男は築20年ほどの一階建ての家に目をやると小刀を持った左手を上げた。そして小声で「ファル・フレイム」と言った。その後小刀から火花が飛び散りやがて大きな炎の渦を出現させた。

「ふふん、いいねえ。炎つて。」

他者から見れば何とも奇妙で恐ろしい光景だが、そこには人一人いない。夜中と言つこともあるが、これはまるで時間が止まつたかのような静けさだ。

「さあて、8軒の火災現場の『登場だ！』

男の叫びと共に炎が男の狙つた家に迫つた。

「ん？」

しかし、みるみるうちにその絶大な炎の威力が薄らいだ。

風であつた。尋常ではないほどの突風が轟音をあげ男を襲つていた。これまた不思議な光景だった。

風が弱くなり、ふと気がつけば先ほどの炎はすっかり消え失せていった。

「ほひ、やつと来たか。」

男が上空を見上げると少女が風の如く舞い降りてきた。

淡い桜色の髪とスカートをたなびかせ、赤色の洋風チックな服装で細い体つきには似合わない自分の身長と同じ位の高さをもつ大剣を右手に持ち羽毛のように地上へ降り立つた。

「やつと現れたか。杞憂桜。」

待ちわびたように男は言った。
そしてその少女はそう…
サクラだった。

「ええ、放火魔さん。」

サクラは微笑み続けて言つ。

「それとも火属性の魔法使いさんと言つた方がいいのかな？」

「ふふん、随分余裕そうだな…」

「うん。せっかくの初戦なんだから楽しまなくっちゃね」「

「初戦とはな。ワタシ同様、仲間はいないとは聞いていたがな。」

「へえ、あなたも仲間がないの。」

「ふふん、そうだ。」

ニヤリと笑うその男の姿はなんとも不気味なものであった。
男はその表情を変えることなく言つた。

「ついでに一つ言つとすれば…ワタシがここに来たのも、それ関連。
ここには葉の魔法使いがいると聞いてね。結論から言えば、そうだ
…君を仲間にしに来了。」

「なるほど、あなたは私がここにいることを知つていて、私に気づかせるために放火を起こしていたってことね。」

「ふふん、賢いな。その通り。そして君が来た。君もワタシ同様、神を目指しているのは当然だが……神を諦めワタシの仲間にならないか？」

男は手に契約書らしき紙を出現させた。そしてそれは空中を舞い男のもとからサクラのもとへ渡った。

「なるほどね。この戦乱の撻通りあなたに仕えれば私に神を得る権利はなくなる……逆にあなたが私に仕えればあなたは神を得ることができない。でも見知らぬ他人の仲間……いえ下部なんかにはなりたくないし、まず私は神を諦めたくない。」

サクラはその紙を破り捨てた。

この戦いは200年に一度行われる魔法使い達によるたつた一人に与えられる「神」を目指し戦いあう戦争だ。そしてサクラはこの戦争の参加者であり葉属性を扱う魔法使いである。魔法使いにはそれぞれ武器が与えられ、その武器は自らの意志でこの世に出現させることができる。そして武器が出現しているときのみに魔法使い達は魔法が使える。

この戦いに勝ち残る方法は3つ。参加者に契約書を結ばせ神を得られないし己の部下にするか、参加者を殺すか、参加者の武器を破壊

して魔法を使えなくし、ただの人にさせるかのいずれかだが、3つ目は高度な技量を要するため不可能とされる。

そして今サクラは契約書を破り捨てた。残された手段は一つ殺すか殺されるかだ。

「そうか、それが君の答えか。せいぜい名だけ名乗つておいや… タシはファル。今から君を抹消する！」

ファルの小刀の先端に魔法陣が出現し炎が飛び散りサクラを襲う。

「ええ、望むところ！」

サクラが大剣を軽々と振り回しその炎を切り裂いた。その大剣は見かけ以上に軽い。片手でも軽々と扱える。

サクラはそのまま左手で魔法陣を描き、木の葉を出現させた。その葉は空気を切り裂きながら急速にファルに迫る。葉の先端はまるでナイフのように鋭い。

「なんだ…これは？子供騙しか？」

ファルの炎によりその葉はむなしく打ち消された。

「葉だけじゃないんだから！」

サクラの叫びと同時に風が舞い、それは一つの空氣の刃となり、ファルを襲つた。

「ほつ、風の術を使えるとはな…。だが…！」

ファルが指先から炎を出現させそれは空氣の刃を打ち破つた。

「フレイム・ファル！ 焼け落ちろ！」

> 123393 | 2889 <

ファルの炎の渦がサクラを捉えた。

しかしサクラのまとう赤色衣服が不思議な膜を作り上げ守つていた。

「なるほど、魔術着か…」

「ええ、その通り！」

自信げにサクラは言った。

魔術着とは魔法の力を宿した服のこと。この服も魔法と同様、武器

を出現させたときのみ着用が可能だ。

「だがな……！」

ファルが炎の玉も上空に打ち上げた。

それは、雨の如くサクラに降りかかった。そしてその雨は魔術着のバリアを貫通し、サクラに無数の傷をつけた。サクラはその場に傷を抱えしゃがみこんだ。

「うつひ…こちえ…」

「その程度のバリア、ワタシが打ち破れないとも？」

ファルはサクラのもとえ一歩ずつゆっくりと歩みよった。そして言った。

「君は知っているだろ？相性があることを…水属性が雷属性に弱いといったみたいな。」

「うん、もちろん。あなたは葉は火に弱いっていいたいんでしょ？」

「その通りだ。つまりは君は今圧倒的に不利な訳だ。」

「でも、私にはそんなの関係はない……！」

サクラは叫び魔法陣を出現させた。するとファルの足元の地面から植物の巨大なツルのようなものが現れ、彼を捉えた。

やつた！とサクラは思ったのだが、ファルの全身に炎が舞い上がりそのツルも虚しく焼け散った。

「えっ！？私の束縛葉触が…破られた？」

「全く、今まで16人の魔法使いを殺してきたが、君には失望した。実力は確かにある。だが無力すぎる。火属性のワタシに葉で挑むからどんな強豪かとは期待したが…この程度か？」

ファルの言葉にムキになつたサクラはあれやこれやと自分の魔法をぶつけるが全てファルの炎に呑まれ消えてゆく…

「ふふん、何をしても無駄だ。」

ファルはサクラの脇腹を蹴り上げた。

サクラは走る激痛に歯を食いしばつた。そして倒れこんだ。

「舐められたらものだ…これでも『炎の暗殺者』の異名を持つんだがな。」

「炎の暗殺者ーー?」

サクラは絶望した。

ファルはサクラの腹を再び蹴り飛ばす。サクラはうつ伏せになりあまりの衝撃に耐えられず嘔吐した。

「うう…ははあ…は…あ…」

そんなサクラのうめき声も気にせずファルはサクラの右手を力強く踏みつけた。

「いっいたい…!!」

「ふふん。そりゃそうだろ、」

炎の暗殺者の話は聞いていた。彼が狙った獲物はその日の内に殺されると言われている。そしてその当事者が今サクラの目の前にいて、サクラを殺そうとしている。

つまりはサクラの死は絶対ということだ。

「契約書を破らなければなあ、残念。まだ未来があるっていうの。」

「

ファルはうつ伏せのサクラの髪をつかみ引っ張り上げ上半身を起こした。そして彼女の首元に左手の小刀を突きたてた。

「分かるだろ。君は死ぬんだ。」

「

「私…死ぬ…？」

体じゅうの激痛のせいでサクラは意識が朦朧とする中、サクラは息を飲み込み、目を閉じ覚悟を決めた。

そして自分の判断力の無さと初戦が炎の暗殺者である運の無さを呪つた。

自分が馬鹿だったのだ。実力があるからといつても、やはりこの戦乱を勝ち抜くなど不可能なのだ。仲間もいない、戦おうとも対策など考えずただ真っ正面から突っ込んでいく。本当に情けない大馬鹿者である。私には神などただの夢でしかない…

サクラはまだ失望するしかなかつた。

「さよなら…私…」

サクラの一言も虚しく、ファルはサクラの首を切り裂いた。

切り裂いた、はずだつた。

しかしその小刀は何かによつて弾かた。
ファルはその力に圧倒され後退した。

「なんだ…？」

ファルの見る先には…

太刀とも言えるほどの長刀の剣。焦げ紺色の髪の間から見える瞳。
蒼い装束をまとい、無言のままそこには青年がサクラの田の前に立
つていた。

その青年を見たサクラはとつさに呴いた。

しかしその呴いた言葉はサクラが想像もしていなかつたものだつた。

風がたなびく…

この月の下で確かにサクラは呴いた。

「キハク
?」

と

蒼い炎

「……キハク？」

風がたなびいた。

サクラは無意識に咳いた。

彼の名を、キハクという名を…

「何者だ？お前は？」

「ただの人、ただの高校生… そうだな名前だけでも言っておくか。」

青年はその鋭いまなざしをファルに向け己の名を言った。

「大咲綺迫。」

青年は間違えなく大咲綺迫であった。

サクラはそのボロボロの体でゆっくりと立ち上がり、そしてキハクの方を見た。

「キハク…、あなたどうして…？」

力の抜けた声でサクラは言った。キハクはゆっくりとサクラの方を振り向き素っ気ない口調で答えた。

「俺はこの町にいるたつた一人の葉属性の魔法使いである人物に仕えるよう使命をうけた。ただの魔法使いだ。」

「使命…葉属性って、それ…私…？」

サクラは驚くしかなかつた。同じ高校に魔法使いがいたこと、そしてその魔法使いが今自分の味方としてこの場で戦おうとしているのだ。

キハクは剣を構えた。

「とにかく、話は後にしよう。俺はあいつを片づけなければならぬい。」

「ふふん、片づけるって。ワタシは異名すらもないような雑魚にやられるほど弱くないぜ。」

ファルは余裕そうな表情で体じゅうからバチバチと火花を散らした。彼は本気だ。

「ああ、知ってる。ファル・ケルアドナ…炎の暗殺者の異名を持ち、火属性攻撃はもちろんのこと打撃攻撃も得意。俺から見れば強敵かもしれない…。」

「ふふん、わつかてているではないか。それでいてワタシとやううとはな。」

ファルは炎の渦を出現させた。

「焼け落ちろ！…！」

そして何のためらいもなく炎はキハクのもとに迫った。

「キハク！」

サクラの叫びが響いた…しかし…

キハクが剣持つた右手をゆっくり上げるとキハクの目の前でその炎の渦が消えた。

「…なんだ？」

一瞬の隙をつきキハクはファルに迫り剣を振り下ろした。間一髪で

ファルはその攻撃を避けた。この不可解な状況にはファルは驚愕した。

そしてキハクの剣から魔法陣が出現し青い炎がどびつちた。その炎はファルを直撃し焼け跡を残した。

「なるほど、お前はただ者ではないな…。火変種属性を使う魔法使いつてわけか。面白いかかつてきな。」

変種属性。それは未だ詳細がはつきりしていなくどういった能力があるのかも分からぬ属性だ。通常の属性同様、生まれつき運命的に有される属性で、火・水・雷・葉・地とある。火の変種属性はどうやら、炎の無効化の能力があるようだ。

「ああそうだな、覚悟を決める。お前の魔法人生に終止符を打たしてやる。」

ファルの炎とキハクの青い炎が飛び散る。だが、ファルの炎はすべて青い炎によつてうち消されてしまう。この状況下では圧倒的に不利だ。

「火変種…通称、青火属性。なかなか便利だな。」

ファルは言った。

だが、いくら無効化できようとも限度がある。キハクはファルの攻撃をすべて無効化してしまう。つまりキハクは、本当にただ者では

ないのだ。

その時ファルは不気味な笑みを浮かべる。

「ワタシの炎は通じないようだな。だからお前にほこれをくれてやる。」

ファルの全身を炎が包み込む。

「ワタシの必殺術、フレイム・デス・オーバーだ。」

「随分と変な名前だな。」

「なんとでも言つがいい。ただそういうセリフはこの技を受けた後に言え。生きていたらな。」

ファルはその炎を身にまといながらキハクに迫り殴りかかった。キハクはその攻撃を避けたが、キハクに衝撃が走った。見るとキハクのいた位置は地面が抉られ無残にも粉々に砕け散ったコンクリートが散らばっていた。

「身体能力を強化する術だね、本氣か…。それじゃあ、俺も少しだしてもいいかな、本気。」

「本気だと？」

キハクの剣が青く光り輝いた。

次の瞬間キハクが消えた。消えてはない、早すぎて見えないのだ。

そして…散つた。

粉々に砕け散つた。

ファルの小刀は跡形もなく。

「一つ言おう。止まらぬ速さ、青い炎を吐き全てを燃やし尽くす蒼龍がこの戦乱に参加したという。その『蒼龍』とは誰のことだと思つ?」

キハクがそう言つと力を失つたファルはその場に倒れ失せた。

「『蒼龍』。自分で言つのも恥ずかしいけど、それ俺のことなんだ

…」

主人と下部と紅茶と

勝負は一瞬にしてついた。敗北、完全なるファルの敗北だった。油断していたわけではない、ただ想像以上にキハクが強く、素早かつた。そして何よりも彼が蒼龍であつたことがファルにとつての明らかな誤算であつたであろう。そのことに気が付いていればおそらく彼との戦いに身を引き別の魔法使いのもとえ戦いに行つていたのかもしれない。だがもう遅い、小刀は壊され魔法は使えなくなつた、神も目指せない。雄一の救いは彼がファルの命を奪わなかつたことであろう。目が覚めればファルはただの人間となる。彼の言う通り確かに魔法人生に終止符が打たれた。

ファルとの戦いを終え、一人はキハクのマンションにいた。キハクのマンションは五階建て。彼の部屋は一階にある。そしてキハクはサクラの傷の手当てをしていた。サクラは武器を消し、服装も魔術着からパークーとスカート姿に変わっていた。

「まったく、葉属性のくせに回復系の魔術を何一つ使えないとはな……。」

キハクは呆れた表情でサクラに魔術をかけていた。

「ううう……、痛いとこを突くな。苦手なの、回復とか補助とか……」

「変わってるな、ふつう葉はそれが得意なはずなのに。と言つても青火の俺も十分変わってるがな。ほら、終わつたぞ。」

「うん、ありがとう。」

魔法による治療が終わるとキハクが一瞬光り輝きふと見ればいかにも戦士らしき洒落た青い服装からいつもの見慣れた制服の姿に戻つた、彼の剣は消えていた。

「でも、キハク、すごいよ！あの炎の暗殺者を倒すなんて。しかも殺さず武器破壊！」

「そんなに褒めることでもないさ。ただあいつが火属性だったから楽に倒せただけだよ。」

ファルはキハクによつて武器を破壊された。もうファルは魔法を使うことができない。だが魔法が使えなくなると人生が嫌になり犯罪を犯すような者たちもよくいる。が、ファルはそういう人物ではないとキハクは確信していた。なにせ放火事件の際、死人はおろか人がすらだしていない。暗殺者と呼ばれていたはもののそれはこの戦乱内の話だ。彼の素顔は正直で真面目な立派なサラリーマンだ。つまりは彼は民間人を襲うような悪者ではない。

「紅茶でも飲むか？」

キハクはサクラに問いかけた。彼女は優しく「うん」と頷く。そしてポットからカップにお湯を注ぐキハクの姿をじっと眺めていた。サクラは何か新鮮な思いを抱えとてもきれいに片付いた部屋をぐるりと一周見わたした。八畳ほどの一人暮らしには十分な部屋。サクラは正座したまま時計を眺める。時計の針は3時半を指していた。

「はい。どうぞ。」

「ありがとうございます。」

サクラは紅茶の入ったコーヒーカップを受け取った。

「サクラ、これ。」

「これって、契約書?」

「そう、サクラのだろ?」

「うん、でも渡していないのに……どうして……」

「君のお母さんからもらった。記入しておいたよ。」

キハクはサクラに契約書を手渡した。彼は契約書にサインしたためもう神を田指せない。そしてサクラに逆らい攻撃でもした際にはキハクは剣を失う。つまりは魔法を失うことになる。

「うん。ありがと。でも仲間が来るって聞いてたには聞いてたけど、まさかキハクだつたなんて…」

「ああ、俺も驚いた。サクラのお母さんの名前は桜木だろ? なんでサクラは杞憂なんだ?おかげでこうして見つけ出すのに苦労したよ。名字しか聞いてなかつたからね。」

「ああ、ごめん。ただ桜木桜なんて、ちょっとやでしょ?だから一人暮らしするときに変えたの。」

「へえ、変えの… そんなことできるんだ。」

「うん、魔法でなんとかした。」

「随分、無駄な魔法だな…」

「無駄つて、習得に結構時間かかったんだよーー!?」

「はあ、『苦勞…。その習得時間、もったいない。』

「悪かつたね！それより、はい」

サクラはキハクの鼻の先にカップを突き付けて。

「何だ？」

「おかわり」

「意外とわがままだな。さすが『春を呼ぶ姫』の名を持つだけはある。」

「おおー私の一つ茶、知ってるんだ。」

「一応な。」

キハクは紅茶を再び入れサクラに差し出した。

あまり有名ではないかといふが、自称しているだけであるがサクラにもキハク、ファル同様異名がある。しかし、よくキハクが知つていたものだ。

「うん、おいしい！私の下部なんだからしつかり働いてもらわなく
ちゃね、蒼龍くん」

「……はあ。分かりましたよ。お姫さま。」

わがまま姫の満面な笑みに癒されているのか不服に思つてゐるのか、キハクは分からなくなつていた。とにかく疲れた。それが今の心境だ。しかしサクラは…

「おおー！ その響き！ いいね！ ねえ、キハク！ もおいつかい！」

「は!? あつあ…お姫様…」

「モウ一回」

「…お姉さま。」

「いい！ もお一回！」

元気なのか、浮かれているのか、馬鹿なのか。キハクはこのまま『お嬢様』とサクラが寝る瞬間まで言わされ続けた。そして自分の仕える主人が彼女であることに絶望した。明日は学校。彼はそんなことをすっかり忘れていた。

「…………お姫さま…………」

朝7時、キハク起床の第一声はそれだった。

目覚めの悪い朝

お姫様…お姫様…お姫様…

「う…う…う…お、」

今にも力尽きそうなうめき声。この清々しい朝の陽気には何とも似合わない。この声を上げた者の正体、それは制服姿のままの大咲綺迫であった。キハクは自分の部屋のカーペットの上に横になつて寝ていた。そして「お、おお姫さま…。」と苦しげに言い目が覚めた。

「ん? もう7時か…。なんか嫌な夢でも見たかな、疲れた。… そういえば今日学校だつけな。」

キハクは横になつたまま天上を見上げた。

小鳥が轉る音、日差しの暖かさ…5月の朝はなんと過ごしやすいことか。

朝の僅かな余韻に彼がしつたてていると、なぜか右の耳元がスゥスウした。そよ風か、いや窓は開いてない。

気になつてキハクは右側を振り返る。そこにはあつたのは口だった。その口から出される吐息がキハクの耳元を撫でていたのだ。キハクは驚き思わず声を上げ顔を真っ赤にし立ち上がった。そしてその音に気がついた吐息の持ち主である杞憂桜はゆっくりと起き上つた。

「… つんん？ なにこじとお…」

「ん、ああ、そういうえばそうだっけな…」

キハクは昨日のファルとの戦いを思い出した。疲れてるわけだ。
しかしこの様子だと一人とも気が付かないうちに寝てしまつたらし
い。

「ふあわわ、キハク… おは。」

「おはよー、サクラ。知らない間に寝てしまつたらしいな。」

「うふ、しかも今日学校だっけね。」

「ああ、とにかく朝はんだ。半ば出なればならないからな。」

寝起きのサクラにキハクは妙な感情を覚えたがそれは放棄した。

学校は朝の学習という余分な学習時間があるため8時までには学校
に行かなければならぬ。キハクの家から学校までは徒歩で15分
ほどかかる。眞面目な一面を持つ彼は最低10分前までに到着して
ないと安心できないようだ。

キハクはキッチンに立ち食パンをトースターの中に放り込んだ。
そしてコーヒーを取り出しコーヒーを入れようとしたとき、

自分の隣に何かを感じた。隣にはサクラが立っていた。

「キハク、私がやるよ。」

「大丈夫。」

「でも泊めてもらつたし……」

「気にするな。禄に寝てないんだ。サクラは休んでいいよ。」

「えー、うーん……それもそうだけど、それじゃあ一人でやろう。」

「あ？ あ？ ああ……」

二人は自分のコーヒーを自分でいた。彼らは交互に砂糖を入れミルクを注ぐ。コーヒーを入れた際キハクは腕に触れるサクラのい肩が妙に気になつたが、それもどうでもいいこととする。

一人での朝食は新鮮さそのものだった。

リビングのテーブル、椅子不必要にもは4つある。友達が来たとき用に余分においてあるのだ。彼らはその椅子に座り向かいあつた。

仲はもともとよかつたはものの「のよう」に一人で食事するなどいうことはしたことがない。

サクラは食パンを頬張りながら微笑んでいた。

キハクはその何とも言えない呑気さを茫然と眺めていた。

「そういうえば、キハクって一人暮らしなんだね。」

「ああ、まあな。そういうサクラもそうだろ？」

「うん。だからさ、こうして人と面と向かって食事するの久しぶりなんだ。」

「ふーん、まあ、俺もそつだがな。」

「…なんか、ちょっと嬉しいかも…」

「ん?なんか言ったか?」

「なんでもないよ。そうだ、ひょいひょいひょい~」

サクラは大剣を出現させ魔法陣を描いた。そして上空から何かが出現しキハクの頭に覆いかぶさつた。

「うーーー？ なんなんだよ、おい。」

「あー、『めん』『めん』！ それ私の制服。」

「また……魔法を無駄に使う……」

「だから、無駄じやないって……！」

キハクはため息をつきがてら制服をつかみ食事を終えたサクラに渡した。

彼女はそれを受け取ると立ち上がり勝手に洗面所に向かつた。

「着替えるよ～」

サクラは洗面所の戸を閉じる。

キハクは無反応に「一ヒーを飲んでいた。

ところが閉じたはずの戸が開き戸の僅かな隙間からサクラの顔がひょっこり出た。

「ぐれぐれも覗かな」よつこー！」

ぶつは、とキハクは口に含んだコーヒーを吐出し、むせた。

「だつ誰がのぞくか！..！」

しかし戸は閉まりサクラにその声は届いてはなつかた。
そして非常に不快にさせる鼻歌が戸の向こう側からながれてきてい
る。

「つたく、本当に呑氣な奴だなあ。」

キハクも立ち上がり食器を片づけ始めた。彼は一つ忘れていた。どうでもいいことどうでもよくないことだ。それは…竹野霸流のことだ。

キハクとハルは家が近い上、ハルは朝いつもこのマンションにわざわざキハクを迎える。ハルが迎えに来たときサクラとともにキハクがでたらどうであろう…。いかにも変である。
彼はそのことをすっかり忘れていたのだ。

そんなことも気にともせず洗い物をし、歯を磨き最終的にはキハクとサクラの準備が整った。後は家を出るだけだ。しかし…

ピーンボーン

キハクの部屋のチャイムが鳴る。その音とともにキハクはハルの存在を思い出した。

「！？。しまつた！…これは…！」

「おーい、キハク！…行くぞ！」

どうからどう聞いても明らかにハルの声だ。このままサクラと一緒に出たら不謹慎にもほどがある。とにかくここはハルに先にでも行つてもう必要があった。キハクはサクラに少し待つよう言ひドアを開けた。

「おい、なにノロノロしてんだ？行くぞ！」

「ハル！悪い！まだ準備ができてないんだ！…先行ってくれ…！」

「お前らしくないな。分かつた。」

キハクは安心した。

「待つてやる。」

絶望的だった。なぜ待つ。先に行けと言っているのに。
そしてさらには…

「キハク？だれえ？」

サクラが出てきてしまったのだ。
言ってみれば最悪のシナリオだ。ハルは想像以上に目を丸くしサクラを見た。

「…」

「…」

「…」

沈黙。沈黙しかなかつた。当たり前だ。

そしてこれは明らかにハルにキハクとサクラが一夜を（実際そうなのだが）過ごしたように思われている。
そんな何とも言えない空氣の中、第一声を放つたのは誰か。サクラ

しかいない。

「3組の……竹野君だよね？」

「ん……ああ。」

ハルは硬直したままだ。そしてキハクとサクラを見て「二人はどういう関係で……？」と言った。

「え……えー」

サクラとキハクは顔を見合せた。

主人と下部などという正答を言えるはずもなかつた。

キハクとサクラにはどうすることもできなく、ハルにはサクラがキハクの家に朝荷物を届けてくれたことを言い訳にした。しかし結局は三人とも一緒に登校した。一時はどうなるかと不安に感じていたキハクだが、サクラが予想以上に話題を持ち出してくれたおかげで気まずい状況はとりあえずは免れた。が、ハルの態度が明らかにいつもと違う。どうやらキハクとサクラに気を使っているようだ。

学校に着き朝の学習、授業を受け、休み時間が訪れる。そんな中、サクラの様子がいつもとは格段に違っているのにキハクは気が付いた。休み時間キハクに普段話しかけりすることもなかつたサクラが友人の相川や矢口を押し退けて今日は必要以上に話しかけてくる。キハクはそんな彼女の行動には特に気にすることもなかつたが…

「キハク！—さつきの数学寝てたでしょ！—」

サクラは席に着いたままボーとしているキハクのもとに訪れた。

「ん？ああ、眠かったからな…。だいたい数学は寝ることを前提に授業にでてるから。」

「そんなんだと、いつか赤点となるぞ〜」

「まあ、それはないだろ。」

「油断大敵！現に去年赤点取りましたから。」

「おいおい…。それじゃ相川以下だな…まあいいか。」

「そんなことよりねえ、購買いかない？」

「ああ？…そりいえばもつ頃か、朝遅かつたから弁当作れなかつたん
だっけ…めんど…」

「うーん、何なら私、買つてこようか？」

「マジか？それはかなり助かる。んじゃ、チヨココルネとサンドウ
イツチを頼む。」

キハクは制服のズボンから財布を取り出し500円玉をサクラに渡すと「任せて！」と言い彼女は教室を飛び出した。その姿にキハクは少々見とれていた。考えてみればサクラは結構美人。クラスの男子からも人気があるし、少し気取っているところはあるが根はや

さしく元気で明るい性格だ。そんな彼女が今キハクのために購買に行ってくれている。なんと幸せなことか。

それにもしてもサクラのこの変わりようは何か?つい昨日までこんなにサクラとかかわってはいなかつたのに。ただ正直キハクにはまた一人良い友人ができてくれたことというわけで喜ばしいことではある。一つ言つとすればサクラが話しかけてくる際、相川からの鋭い鬼のような田線が気になることくらいだ。

そういうしていふうちにサクラが胸元に菓子パンやサンドウィッチを抱えキハクのもとに戻ってきた。

「キハク!一緒に食べよー!ー!ー!

「はー?」

「だから、一緒に食べよー!ー!ー!ー!

「ん…あ、ああ。でも急にどうした?」

「ああ、「うん。」めん、なんかしつこかつた?」

「いや、別に…ただ。……なんでもない。食つか。」

キハクは席に着いたままサクラからサンドウィッチとチヨコ「コルネを受け取った。サクラは自分の座席を持ってきてキハクと向き合つ形になるように置き座つた。

サクラの昼食はカレーパンとドーナツであった。キハクもサクラもこの何とも言い難い関係を特に気にすることは何もなかつたが、クラス内ではそうはいかない。クラス中の誰もが何事かと彼らに注目した。それはそうである。一人つきりの昼食、こんなことができるのは恋人同士ぐらいしかいない。クラス中の誰もがざわついた。しかし、二人はそんなことすらも気にするような性格ではない、というよりも気が付かないようだ。

「ねえ、大咲君とサクラちゃん一緒にご飯食べてるけど付き合つてんの？」

「知らない。」

「おい！見ろ！キハクのやつ、なんて羨ましいことを……！」

気が付けばクラス内はこの話題で覆い尽くされていた。

春が来た、お似合いだ、と祝福の声を上げる者、あの野郎、あーあーいいねえ、と嫉みの声を上げる者、人それぞれだが誰もがこの状況に対してキハクとサクラの甘い会話を想像してきた。しかし実際は…

「でも、初戦でファルを倒したのは少しまずかつたかもな…」

キハクが何気なく呟いた。サクラはカレーパンを口に頬張りながら首をかしげた。

「なんだ？」

「いや、一応彼は有名だからな、炎の暗殺者として。だから逆にファルを倒したからということで実力が挑みに来ることだってないわけではない…そうすると未だ仲間が少ない俺たちにとっては不利になる。」

「つまりは、仲間を早急に集める必要性があるってこと?」

「うん、と言つても魔法使いに遭遇しなければ話にならんがな。しかし、ファルは珍し形だな。実力者はこの戦乱が始まる前から仲間を有しているのがほとんどなんだ。だからそういう奴等に限つて仲間を集める必要がない。ある種組織化している。もしそういう組織化した奴等が俺たちのもとに来たらそいつらの主人を見る前にエンドだな。」

「うーん…でもキハク、蒼龍が私にはいるから。」

「アホ、いくら俺とてさすがに20人30人と一気に攻められたらお手上げだよ。青火はそんなに万能じゃないし俺の実力もまだまだだ。」

「でもキハクならやれるよ。でも…ふーむ、仲間ね…」

サクラはドーナツの袋を開けつつ言った。

確かにキハクの言うとおりである。この戦乱を生き抜くためには主人を守ることのできる優秀な下部が何人も必要となる。もしかしたら昨夜ファルを倒さず脅迫してでも彼を仲間にするべきだったのかもしれない。正直一人だけではこの戦争でほとんど勝ち目がないといえよう。

キハクの言う実力者がこの町に訪れないことを彼らに仲間が集まるまでは願うしかない。

「若干魔法の臭いが残っています。火と葉と思われます。やはり昨夜、炎の暗殺者が敗れたというのは本当らしいです。」

黒いスーツに身を包み赤い長髪に凍りつくような鋭い目つきをした背の高い細身の男が携帯電話を片手に先日キハクとファルが戦った道路に残つたコンクリートのひび割れを見ていた。男の通話の相手は甲高い声で言った。

「さすが、シオ。情報が早くて結構。こちらも準備ができ次第日本に向かう。」

「了解、ボス。ガラクの方にも連絡しておきましょつか？」

「ああ、頼む。場合によつてはお前たちに彼女討伐を命じるかもしない。」

「お任せください。それが我々の仕事でござりますから。」

「とにかく今はその炎の暗殺者を倒したと思われる杞憂桜とやらを見つけ出し様子を伺え。では。」

通話が切れ、男は携帯電話をズボンのポケットに突っ込んだ。 ファルの敗れた情報はすでにあらゆる魔法使いたちに広まっていた。 魔法の種類の中には探知というものがある。これを扱えば誰が敗れ 誰が勝ち残ってるか瞬時に把握することができる。極めればその者達の居場所まで把握できる。男はこの情報の収集力からこの力を有しているのだろうか。

「ふふ、しかし面白い町だな、ここは…。魔法使いが杞憂桜だけならともかくこれはこれは…」

やはり現実は甘くない。

何せ二人はこの戦争の扉を開けてしまったのだから。

この戦乱では戦わずしては生き残れない。

たとえうまく逃げまとったとしてもやがては見つかる。

逃げることなど不可能なのだ。

生き残り神を目指すには戦い勝ち残る実力と精神が必須だ。
この戦乱に出場する最低の条件……

魔法使いである

神の力を有していない

命を懸ける覚悟がある

扉を開けてしまった一人に残されたこと、もはや日常生活などもは
やどうでもいい。

生き残るか死ぬか……いや、生き残る力があるかないかそれだけだ。

そして最後の最後まで生き残ったとき神を得ることができる。

「サックらん！…」

サクラとキハクの昼食中に容赦なくサクラに後ろから何者かが抱き着いた。その正体は一人しかいない。それはサクラの友人城之崎茂美だ。彼女は自分の頬をサクラの頭に撫でつける。その迷惑極まりない行為に不快感を心に寄せたが彼女に怒ったところで何も変わらないことは今までの経験上ハツキリしていた。

「んもー、急にびっくりしたじゃない。何？」

「えー、サクラがいたから。」

「だから、いても抱き着かない。」

「えー、いいじゃん！…それにしても今日はどうしたのですか？」

サクラは「何が?」といつも見えた。

「何で、だつてお一人さん一緒に」飯食べてるしーもしかして、口
レ?」

モニはサクラに接着したまま右手の小指を立てた。バタ、キハクの机の中から筆箱が零れ落ちた。キハクはあわてて筆箱を拾い上げたのだが、まさか動搖しているのか少々目が潤んでいる。一方サクラは微笑みながらそんなんじやないよ、と言つ。確かにそんなんではないが実に説明しがたい関係であるため説明がつかない。

「ふーん、予想が外れたみたい。それはさておき明後日サクラ暇?」

「え? うーん、暇かな?」

「んじやんじやー、一緒に街に買い物行かない?」

「買い物か? うんーいいよー!」

「それじゃあ、駅前に…1時集合でもいい?」

「うん……こいよー！」

「よし、決定！…それではお邪魔しました！…お一人仲良くな~」

モニはサクラを開放し右手をヒラヒラと振りこの場を去った。

「あー、首痛…」

「お疲れ、日曜に買い物だつて？」

「うん、そうだよ。」

「そうか、俺もそろそろ服とかほしいんだよな…」

「それじゃあ、キハクも来る？」

「いや、大丈夫。」

「えー、行こうよ~」

「大丈夫だつて。そもそも城之崎さんの断り無しで行くのはまづい
し、申し訳ないからな。」

「うーん、そもそもそうだね。」

キハクは何か説得をした。

行きたくない訳ではないが変な噂が出回つても困るだけだと考えた
のである。

しかしその件に関してはもう遅いのだが…

キハクとサクラの関係はクラス内の隅から隅へと伝わった。とは言つても二人はそういうものを気にするものではない。ただキハクが優一気にすることは、相川の態度だ。

友人相川義就の彼への態度は彼がサクラと会話することに悪くなる一方だった。

「お前は俺を裏切った」「モテる奴は失せればいいのに」「あーあ、神様、なんで僕には」などとぼやいてばかり。キハクが何度もそういう関係ではないと言つても聞こうとはしない。どうすることもできなく矢口に相談するがまともな意見は何一つ生まれなかつた。他の友人たちがいつもと変わらぬ態度であつたのがせめての救いである。

ハルとの帰り道はキハクにとつて思いがけない相川に対するストレスの発散場所であった。もともと相川はキハクに対する負けられないという意思が変なところで強い。去年、相川の得意科目である世界史のテストでキハクが見事勝利したときはどれだけ悔しがつたとか…そして彼が収まるまでに約一ヶ月とかなりの時間がかかり苦悩の日々が続いた。

キハクにとつてそういう変な意識がなければ本当にいい友人なのだが。

「あーあ、疲れた…」

キハクは自分の部屋に入ると真っ先にベットにダイブした。

なにもサクラが悪いわけではない。キハクにも責任があるとは言えない。考へても仕方はないことだが無性に気になってしまふ。なんとか腹立たしくも感じられたが、深くは考へないことにした。それよりも問題なのは…敵の襲来だ。

この戦力では太刀打ち出来たとしてせいぜい10人までが限界だ。それ以上の人数で一斉攻撃でもされたら一溜まりもない。もともと仲間がないサクラだ。もう20人30人といった部隊を形成できるほどの仲間を一人一人集めていく余裕などないのかもしれない。ならば方法は一つ。もともと大人数で構成された集団隊の主人に契約書を結ばせ配下にしその集団ごと仲間にするか、或いは相当な実力者を仲間にし敵なしの状態を作るかだ。どちらにせよ厳しいことに変わりはない。仲間を作ることは想像以上に難しいのだ。

「こままだと、マズイな…」

「ワープ…！」

「げふつ…」

キハクの背中の上に重いものが落下した。信じられなかつた、悪夢だった。ワープ、要するに瞬間移動使えるもの、このタイミングの悪さ、落下位置の悪さ、この声、どう考へても杞憂桜しか当てはまらない。

「んん？」

サクラは自分の下敷きになつているキハクらしき人物を見て立ち上がりた。

「あわわ！！きつ キハク！？ごめん！…大丈夫！？」

「うつうづ、一応大丈夫だ…」

キハクは腰を抑えながら起き上つた。どうやら結構な痛手であつたらしい。

「本当に大丈夫！…？」

「ああ、大丈夫だつて。気にするな。それよりどうした？何か用？」

「うん、うちにいても一人と寂しいから泊りにに来た。」

「そつか…泊りに…。ん？…はあ！…？」

相川という頑固野郎の次は桜という迷惑人間であった。キハクはサクラの頭の脳構造に異常があるではと疑つた。高校男子の家に高校女子が泊りにくるなどどう考へてもバカかアホとしか言いようがない。彼女の感覚が多少変なところがあるとは前々から感じてはいたがここまで来るともはやどうしようもなくなつてしまふ。キハクは頭の中でバカ、アホを連呼した。だがサクラのバカっぷりはこれだけでは終わらなかつた。

「とか、うん毎日泊まらせもらいます……」

「それはその……つまりは、同居しようとする……？」

「うう、それ。」

そう、それ……じゃないだろう……キハクの脳裏には変体の一文字が浮かび上がつた。

彼女はもしかしたらもう取り返しのつかない領域の人間かもしれない。確かに一人暮らしよりも話す人物が一人でもいた方が毎日の生活は楽しいかもしれないが、高校生の異性同士の同居は世間的に見てどう考へてもいい評価を得られない。ここはきつぱりダメだと言つた方がいいのである。

「……あのな、いくらなんでもそれはまずいだろ……」

「主人の言つことが聞けないのか……」

「いや、でも……」

もはや仲間集めのことなどビリでもよくなっていた。

待てよ……キハクは考えた。

仲間がない……

冷静に考えるとサクラの選択はもつともかもしれない。そう、仲間がないのだ。そんな中サクラが敵襲にでも陥つたらどうであるか。助けに行けるのはキハクだけ、ならば極力すぐ助けられるところにキハクはいた方がいいのかもしない。高校生の男女が同居とは風情的にはよくないがこの戦乱を生き抜くには有効な手立てだ。

「まあ、互いにすぐ助けられるつていう点では有効か……そうだな、

キハクは世間的な目も気にはなつたが、（一番気になるのはこの先サクラがキハクの生活に何かしらの支障をきたすのでは？）と（うことだが……）ここではデメリットよりもメリットの方が大きい、何よりもこの戦争のことを優先とした。だから

「いいだろ。」

OKを出した。サクラは目を丸くして少々驚きながら言った。

「えーー!? ホントにこのの?」

「ああ、俺も正直一人だと退屈だからな。」

「うふーーーありがとーーー。」

「まあ、その代り迷惑かけるなよ。」

「うそ、その点は心配しないでーーー。」

キハクにてその点が一番心配なのだが、サクラは微笑んで右手でブイサインを作り上げる。それを見たキハクは取り返しのつかないことにしてしまったような気がしてならなかつた。

「とこづわけで今日からここが私の家としますーーー。」

「アホか、ちやんと円に一万払つてもいいからな。」

「ーーーなんと、タダではないとーーー。」

「サクラの日々の生活態度による。生活態度が良ければそれも考へるが悪ければどんどん増えるから覚悟しとけよ？」

「大丈夫！！」

「まあ、大丈夫と信じよう。」

キハクは深くため息をついた。
だが、サクラとの二人っきりの生活も悪くないのでと内心思つて
いる自分がいたことは言つまでもないであろう。

キハクたちが住む町の中心街は高層ビルやらショッピング店やらと人の賑いが絶えない。特に駅周辺部はすさまじいものだ。交通量、人の数、日曜日ということもあるが地方都市も舐めたものではない。そんな町の一角にあるファミリー・レストラン内にて黒いスーツに身をまとい赤い髪の足の長い二十歳ほどの男とストレートの黒髪大きな瞳に黒縁のメガネ、服装はいたって普通の白のセーラーに黒いズボンという衣装の少女が向かい合つて窓際の座席に着いていた。少女は一見高校生のように見えるが年齢は把握できそうにない。男は明らかに外国人だが少女は日本人の面影があった。組み合わせとしては何とも微妙なものだが彼らはいつたい？少女はハンバーグを食べ終わりフォークとナイフを何も残つてない皿の上に行儀よくおく。

「で、結局ガラクは？」

最初に口を開いたのは少女の方だった。

「知らない、あいつは基本一人で行動したがるからな。」

男はタバコを口に銜え、胸の内ポケットからライターを取り出し火をつけた。

「ふーん、まあいいけど。で、シオ今日私を呼んだのは何?」

「ああ、ボスからの命令だ。」

「へえ、こんな極東の地で?」

「それが先週、炎の暗殺者がこの町で敗れたんだ。」

男が言うのは先週の木曜日キハクとサクラが連続放火事件の犯人であるファルとの戦いのことだ。彼らの戦いに関する情報はさまざまなもので多くの魔法使いたちに広まりつつある。それのそのはず、無名の魔法使いに炎の暗殺者が敗れたのだ。

「仲間作らず一人で行くから。馬鹿ね。でも炎の暗殺者を倒すなんて結構すごいね。」

「それで、俺の能力と調査の結果この町にいる魔法使いは杞憂桜、葉属性の使い手ってとこだ。」

「ヤツ確か火でしょ?葉でよく勝てたね。とにかくそのキコウってヤツを殺せばいいんだよね?」

「また、早まるな。それだけならお前とガラクを呼ぶか。この町はなかなか面白い。俺の魔法によれば、もう一人……いやあと三人魔法使いがいる。」

「へー。いっぱいだね。じゃあもしかしたら四人組の集団かもってこと?」

「そうだ。だがそのボスはおそらく杞憂桜だ。」

「なーんだ、結局はキュウを殺せばいいんじやん。」

「そりなんだがな、一応頭に入れとけ仲間がいる可能性が高いと。」

「わかった。とりあえず殺していく。」

少女は座席を立ち無表情のままファミリーレストランの扉を開けて出て行つた。

「……やれやれ、日曜にラサを呼んだのはまずかつたな。あいつは休日に働くのが大嫌いだから、さっさと片付けにかかるぞ。杞憂桜の命ももう数時間だな。」

シオは田の前のハンバーグ定食の食べ跡を見た。

「あの野郎、金払わなかつたな。ちやつかりしやがつて。仕方ねえ、出しあおくか。」

* * *

サクラとの同居生活は思いのほか過ごしやすいものだつた。料理はキハクが担当したが洗濯や洗い物は彼女がきちんと行つてくれた。生活上の問題など何一つ生まれなかつた。時より荷物を取りに瞬間移動などの魔法の無駄遣いが多少気にはなつた。

主人と部下ということで何かしらくだらない命令でもしてくるかと覚悟はしていたがそんなことはほとんどなく逆にキハクの言つことには聞くというきちんとした生活態度であった。

そんな彼女は今日クラスメイトのモミとの買い物とかで朝からいない。キハクはこれでのびのびと羽を伸ばし休めることができる。

「あーあ、なんか疲れたな。」

キハクはベットの上に横たわった。サクラが同居してきたというのもそうだがファルとの戦い後なかなか疲れが取れない。おそらく久々に魔法を使ったからだ。サクラのように普段の生活の一環としてキハクは魔法を使わない。彼が使うときは戦闘の時だけと言える。逆にサクラのように日ごろから魔法慣れとして魔法を使うべきかもしれない。キハクは自分に疲労回復の術をかけた。

「魔法の無駄遣い…か。」

キハクはベットに横たわったまま眠りについた。

* * *

「サクラ」の服とかどうかな?」

「おーかわいーーー！いいじゃんーー似合つてぬよー。」

中心街の洋品店にて周りの迷惑など何一つ気にせず騒いでいたのは杞憂桜と城之崎茂美であった。

の前で得意げに堂々と一回転した。

「買つちやんおつかな?」

「それ絶対良いいって……買っちゃいなよ。」

「うん、買つ……でにサクラも買つ……。」

「アーティストのためのアート」

モミはいつも通りサクラに抱き着いた。

「あーはいはい、お一人さんこんなところで抱き着かない。」

呆れかえった表情で一人を見たのは彼らと同じクラスの女子、沢井アズナであった。アズナはシルクのようにうしなやかでストレートの黒い長い髪をたなびかせている。身長はサクラやモミに比べ長身で大人っぽい。

「んじゃ、私、アズナに抱き着く！」

「あんな、そういう問題じゃないんだけど……」

アズナは飛んでいる虫を追い払つかの如くモミを追い払った。

「もう、アズナちゃんのいじわる～」

「いじわるも何もお前がいつもバカなことをするからだ。」

「バカな行為とは……聞き捨てならんな……」これは友情の証としての行為なのだよ……」

「友情って……ダメだ……いつ感覚がどうかしている。」

モミは列記とした典型的なバカと呼べる存在であつた。それに対し
てサクラはモミよりかはまともだがやはりどこか抜けている。一言
で言えば天然という言葉が当てはまりそうだが、言葉の意味をはき
違えたり常識的欠如がみられるため天然というより純粹にそれこそ
バカに近い。そんなバカ二人の救い手とも呼べる存在がアズナだ。
彼女は唯一このメンバーで常識・知能共に優秀な存在であり、この
バカ二人を叱つてやれる存在なのだ。

「はあーまつたく、この二人が相手だとホント疲れるな…」

「まーいいじゃないか、アズナ！」

「お前が言つセリフか！？」

モミの発言はもはや挑発行為でしかなかた。
しかしそんなことモミが気が付くはずもない。アズナは冷徹な目で
モミを睨んだが、モミは彼女のもとに水色の服を持ってきた。

「そんなことよりアズナ。この服似合いそうじゃない？」

「そりか？つておい！話えるな！？」

「まあまあ、そう怒らすに。」

「お前が怒らせてんだろ！！」

「わー、アズナ恐い！」

怒るアズナ、からかうモミ、そして思わず苦笑のサクラ。他客にとつてはこの上ない迷惑行動である。

だが三人はそんなことを気にするはずもない。そんな三人の一人モミが珍しく眞面目な話を持ち出した。

「あ、そういうえば放火事件、どうなったんだろ。先週一件あつたけど今週は大丈夫かな？」

「ああ、確かに心配だ。犯人が捕まってくれないと安心できんな。」

答えたのはこのメンバーの優等生アズナであった。

「そうだよね。この前はつちの近くでホントびっくりしたんだよ！」

「！」

「ほー、それは大変だったな。しかしが人とか出でないみたいだからその点に關しては良かつたな。」

「」

「うーん、でも次いつ起こるかわからないし…」

「ああ、それは言ってる。」

モミとアズナの会話を何気なく聞いていたサクラ。極力この会話についてには避けたいものだった。なにせ犯人、そして犯人の目的、すべてを知っているからだ。だが犯人のファルはもう魔法使いではないし神を目指す権利もないわけだから事実上もうこの事件は解決も同然。ただ世間的に魔法使いは知られることのない存在であるためこれは未解決事件のまま幕を閉じるのである。

「サクラはどう思つ?」

モミがサクラの顔を覗き込んで言つた。

「え!? わつ私? あー、うーん、確かに怖いよね。警察なにやつてんだかー」

いきなりの振りに動搖したのか、声が裏返つた上棒読みであった。モミとアズナは少々不思議そうな表情でサクラを見たが「そうだよね」「ホント警察何しているんだろ」と同調してくれた。サクラはホツと一息つくことができた。そして自分は嘘のつくことのできな

い人間だと思い知った。

そんな3人集を一人、店の巨大な窓ガラスの外から見ている少女がいた。

「葉属性の臭いがふんぶんしてたからきたけど…。ふーん、あれがキュウ何とか…私と同じくらいの年齢かしら?」

その少女は先ほどファミリーレストラン内でシオという男と会話していた者だった。

「なんか弱そう。あれで炎の暗殺者に勝てるんなら、私でも余裕でいけたかな?正直勝てる自信がなかつたから不安だつたけど…まあいいや、とにかく片づけちゃおつ。」

少女は右手に指揮棒のようなものを作り出せた。そしてそれを演奏者を指揮するように鮮やかに振り動かす。

「作り出せ…結界間…」

風が止まる。光り輝く蒼天の空は黒い雲に飲まれ、そして音が消え

た。行きかう人々の声、車の走る音、全てが消えた。時計の針は10時42分を指したまま動く気配がない。人々は消え、走っていた車はすべて止まっている。もちろんその中に人影はない。信号も止まり電機は切電されているのか。残つたのはこの町。

そして唯一この何とも言い難い奇妙な世界にいるのはこの少女ともう一人…

杞憂桜だ。

音の消えたこの世界で轟音が鳴り響いた。先ほどの洋品店の中から白い煙が立ち込み少女はとっさに目の前の窓ガラスから距離をとる。するとその窓ガラスにヒビが入り粉々に砕け散つた。そして赤い装束に大剣を抱えた少女がその割れた窓ガラスを飛び出し先ほどの少女を襲つたが間一髪、攻撃をかわした。

「あなたがキユウね。」

少女が大剣を片手に堂々と身構える少女に言った。

「やうよ。」

止まつたはずの風が動き出した。風は少女…杞憂桜の目の前で轟音と化した。

「正直いきなり結界が張られたから何事かと思つたけど見えるとこ

ろにあなたがいたから状況がよくわかったの。その上先手が打てた。
ありがとうね。で、あなたは何者、何用でここに？」

「えー私？ そうね… 名前はラサ。」この魔法杖はエルハカスタ。单刀直入に言うとあなた同様魔法使い、私はボスのアリス様からあなたを倒すよう言われているの。」

「なるほど、そういうえば武器の紹介。これは棋風草鈴、大剣だけど不思議なくらい軽いの。その上どんなものでも切り裂く鋭い刃を持つ。しかし、まあ私を殺す…ね…この前、戦闘があつたばかりなんだから少しぐらい休ましてもらいたいんだけど？」

「うん、炎の暗殺者とのやつだよね？ でもボスはだからこそ危険だと判断して私に命令だしたんだと思う。」

「あら、まさか知られてたとは… 情報収集の早いこと。でもその話からするとファルを倒したことが仇となつたみたいね…」

「炎の暗殺者を倒されたことは意外と広まっているわ。まあ、あなたってことはまだ知られてないけど。なにせうちには優秀な情報収集者がいるからね。」

「それで私がファルを倒したって分かったのね。」

「うん、或いはあなたの仲間が倒したか…」

「ふふ、それはどうだかね。」

「どちらにせよ、あなたがボスではないかと聞いているので、特にうらみはないけど死んでもらいます。」

ラサは魔法杖から炎を出現させた。

「暗殺者はあなたの苦手な炎使い…で、私もあなたの苦手な、」

ラサの炎は無数に飛び散りサクラのもとへ向かつ。

「苦手な、炎使い！」

「また、炎…」

サクラの目の前で炎が拡散し消え失せた。サクラは大剣でラサの打ち出した炎をすべて切り裂いてしまったようだ。そして瞬時に葉の魔法陣が出現し暴風とともにナイフ状の鋭い刃を持った木の葉がラ

サに迫り直撃した。その木の葉はラサの白い肌に無数の傷跡をつけた。

「あら、思ったよりやるかも。葉だけでなく風の力も有するんだね。

」

「まーね、それほど誇れることでもないけど。」

「いいなー、攻撃性の能力。私、攻撃力低いから得意じゃないんだ。

」

「それはそうでしょう、さつきの攻撃ほとんど力を使わずに防げたから。

」

「うん、いや本当は仕留められると想つたんだけど。でも痛いなあ、葉っぱ、カッター状になつてたし……」

「ついでに……」

サクラはツルによる束縛攻撃を仕掛ける。

ラサの足元に葉の魔法陣が出現し太く長い植物のツルが4本ラサの体に巻きつき彼女の動きを完璧に封じた。

「これで動けないとい。それで、おとなしく魔法杖を渡しなさい。
そつすれば殺されずに済むわよ。」

「あーあ、呆氣ないなあ……もうダメなんて。」

「葉だからって舐め切や困るのよね。」

「じゃあ、私の目を見て。」

「目?」

サクラはリサの言つとおり彼女の目を見てしまった。彼女の眼は黒縁のメガネを超えて赤く輝きサクラの目を捉え、その後サクラの全身に何か透明な薄い膜のようなものが覆いかぶさつた。

「あつれ!?」

サクラが硬直した。力を入れても全く体が動かない。

「あーあー、引っかかるちやつたね。これ私のもつ一つの能力、目を含ませた者の体に強力な防御の膜を覆わせるつてやつ。ただね、防

御力が高すぎてこれにかかる人は身動きできなくなるんだ。」

「それはそれは。動けないのはいいけどそれだとあなたの攻撃が私に効かなくなるんじゃない? これ防御術なんでしょう?」

「そうなのよね。」

ラサは炎でサクラのツルを何とか焼ききつた。そしてサクラの周辺に猛烈な炎を出現さる。その炎は尋常とは思えないほど熱を放出していた。

「この防御術、攻撃から身を守れても熱は通すんだ。だから、熱であなたを倒すの。なんたって私の得意術は変化形だからね。この先どうなるかお楽しみだよ。」

「お楽しみね…舐めていたのは私の方だったみたい。」

新たな敵

サクラとラサの戦いが始まり結界が張られた。結界が張られると一時的にその空間半径約5キロ圏内をもとされた異世界が形成される。異世界内の戦いが終わるか何者かが外に出るかすれば結界は破れ正常な世界へと戻ることができる。もちろん結界が張られ形成された異世界内は時間の流れが止まっているため通常の人間達が気が付くはずもないしましてや入ることなど到底不可能であるものだ。だが魔法使い達は違う。ある程度近辺の結界を異世界を感じることができ、優秀な人材であればその結界内に入り込むことができるのだ。

そしてその人材に大咲綺迫が当てはある。

キハクは突如ベットの上で目を覚ました。自分の第六感がこの上ないほどはっきりと結界の形成を感じ取っていた。

「うわこれは…まさか結界！？」

キハクはあわてて起き上がる。

その奇妙な感覚明らかに結界が発するものであった。

キハクは心を落ち着かせ精神、体の全神経を張り巡らし集中させる。目を瞑り自分の額に右手の人差し指を突き立てた。結界の大きさ場

所あらゆるもののがキハクの感覚を通じて脳裏に入つてくる。

「………… 結界の発した点は…… 北の方角。街の方……？」

それはキハクにとつて最悪のシナリオだつた。街……そんなところに戦いが起きる要點など一つしかない。今その街に近辺にいる魔法使い、狙われる存在、それは……

「… サクラー」

杞憂桜しかいない。サクラの実力はないわけではない。ある程度の敵ならば倒せるであろう。ただそういう者たちは結界を張ることは困難とされる。つまり結界を張つたということはそれなりの実力を有する者だとこいつことだ。

キハクは右手に剣を出現させた。それと同時に青と白でカラーリングされた魔術着が彼を包み込む。

「まさか、こんなにも早く敵襲に会うなんて……予想外にもほどがある……！」

キハクは窓を開けマンショニ一階の窓から飛び降り飛躍した。キハクの背中から青い粉塵のようなものが飛び散る。空中を鳥の如くぐく当たり前のように飛び姿はまさに龍と言えた。

キハクはファルとの激戦の後戦いが来るとは予想はしてはいた。しかしこれに限っては例外だつた。いくらなんでも早すぎる。こんなにも情報を早く入手できる魔法使いがいるとはなかなか言い難い。だとすればファル同様、他にもサクラを狙っているものがいたとでも言うのか。キハク、サクラには情報収集能力などないし魔力を感じる能力もない。そういう点では敵襲を未然に防ぐには少し難しい面がある。どちらにせよ急がねばならない。敵は強敵だ。ましてやサクラが集団攻撃にでもあつていたら勝ち目はほとんどない。

「急がなきや……！」

だが…

「そんなに急がなくとも大丈夫だぜ！－！」

キハクの右側から光が音を立てて迫つた。突然の攻撃にキハクは瞬時に魔法陣のバリアを出現させ攻撃防いだ。

「急いで戦いに行かなくてもオレがここで相手してやる！杞憂桜の部下さんよ！」

キハクの目の前に黒人の体付きの良い男が立ちはだかった。鍛えら

れた筋肉、パーマがかかった黒髪は男の肩まである。服装はボロボロの灰色のTシャツにジーパン、背中には巨大な剣、いかにも野性的なオーラがにじみ出でていた。男はキハクの目の前で腕を組みながら空中浮遊していた。キハクは目を吊り上げた。

「お前は何者だ？生憎俺は今構っている時間がない。悪いがそこを退いてはくれないだろ？」「

「おいおい、なんか気が立つてん�。だがボスの命令により退くわけにはいかねーんだよな。」

「ボスの命令？」

「ああ、オレはボス、アリス・ジヨラマインの仲間…つーか部下のガラク・ロッサ。ボスから杞憂桜の討伐を命じられたんだが。その訳は先日そいつが炎の暗殺者だかを倒したとかでボスが危険視したんだ。」

「驚いたな。その情報、よく知れたな。」

「まあな、オレたちにはシオリー優秀な情報収集者がいるからな。おかげでこっちは苦労したんだぜ？わざわざ語学魔法を習得しプログラムから日本へひとつ飛びてな。」

「語学魔法は普通幼児期に収集するものだ。収集してなかつたお前が悪い。まあ、お前くらいの年齢になれば一時間も必要かからずには習得できるだろ？だがな。」

「おお、見事。一時間半だ。しかしあ前面白いやつだな。名前だけでも聞いてやる。」

「大咲綺迫。ただの高校魔法使い。」

「そりゃ、大咲とやら、覚悟はいいか？」

「覚悟以前にお前と戦う意思はない。」

「ふふ、よく言つた。悪いが結界を張らせてもらひ。」

ガラクは魔法陣を描き小さな球を出現させた。その球は拡大しガラクをキハクを町を空を飲み込む。周囲は薄暗くなり音、風が消えた。

「いいで、俺が行くと言つても聞かなそうだな。」

「ああ、杞憂桜を倒せば済むことだが、だからと言つてお前を野放

しだできない。」

ガラクは背中の巨大な剣をしっかりと両手で持ち構えた。

「…いくぞーー！」

そして力強く剣を振り下しすと光の刃が出現しブームラン状に変化、
ビリビリと音を立て回転しながらキハクに迫った。

キハクは剣を素早く振り打ち返す。

「なるほど、雷属性の魔法使いか。」

「ああ、そうだ。そういうお前は何だ？」

「火とも言つておくか？」

キハクの目の前に魔法陣が描かれる。

そして魔法陣から青い炎が四方に飛び散った。

「火と言つても青い火、なんだけどね。」

「火と言つても、青い炎……なんだけどね。」

キハクの放つた青い炎は四方に拡散しガラクのもとえ迫つた。ガラクは防ぐ手立てなどなくすべての攻撃を真に受ける。爆発音とともに周囲に煙が立ち込めた。

「避けることもせずに、敢えて直撃を選んだか。」

「ああ、避けるのは困難だと思ったからな。お前、炎変種の使い手か。どんな能力だか楽しみだな。」

「青い火……青火属性、火変種の部類に入ってるけど正直どんな属性かわからないんだ。」

「当事者のお前がわからないんじゃ、オレにはさっぱりだ。以前、雷の変種と戦つたがあいつはやばかったな。どういうわけだが俺の攻撃がほとんど効かなかつた上、攻撃力が尋常じゃねえ。初めて逃げるという選択肢を選んだな。」

「なるほど、だが俺に対しては逃げるという選択肢は使わないようだな。」

「ああ、お前は雷じゃなく火の変種だからな。」

「まあ、いい。」

キハクの剣が青く輝く。

「行け！！」

キハクが剣を一振りすると空気が渦を作り火花が飛び散る。

「魔法にもさまざまな系統がある。変化、回復、強化、防御、攻撃…、俺は攻撃系を得意とする。しかも打撃などではなく、魔力による攻撃がな！！」

キハクの叫びと共にその竜巻が放出されガラクに迫る。

「なるほどな、それはつまーわ。」

「まあね。」

「だがな、オレも負けちゃいられない。その力見せてやるーー。」

ガラクはキハクの放つ竜巻をその巨剣で切り裂き無効化させた。そしてキハクの右側からガラクが攻め入り巨剣が迫る。あまりの大振りであつたため避けの動作に素早く移ることができた。しかし、空振りの巨剣から後を追うように雷が現れキハクの剣に飛来する。

「！！」

高圧電流が剣を伝わりキハクの全身に流れた。恐ろしいほどの激痛がキハクに走った。

「ぐうう…、」

「避けたはずなのに…てか？そりや、そつ。お前はちやんと攻撃をよけた。しかし残念。オレの電気はな武器に飛来する能力がある。簡単なはなしさ、武器を持たなきや電機は飛来しない…ダメージゼロだ。」

「だが、武器を手放すということは俺が魔法を使えなくなる。」

「そうだ、だから敗退は逃れられない……で、どうだ？」

「どうだ、と言われたところで意見は変わらない。」

「なら、いいのだな？」

ガラクは巨剣を振り回した。すると四方八方に雷球が飛び散り空中に浮遊したまま留まつた。ガラクの表情が変わった。

「本気…で行くぞ…！」

無数の雷球がキハクの剣をめがけて一斉に超高速で動き出した。キハクは上空に飛び上がり飛び回つたが、

「チ…追尾してくる雷球か…！」

キハクの飛行速度に雷球もついてきていた。キハクは剣を構え拡散する青い炎を打ち上げ雷球を一掃した。そしてすぐさま四つの火球をガラクにめがけて放送出る。火球は迅速を醸しながら見事にガラクに直撃した。どうやら、あまりの唐突さに防御も回避もできなか

つたようだ。ところがガラクは顔色一つ変えず無傷のまま浮遊していた。

「今の攻撃、早いな。だがオレにはこの鉄壁とも言える筋肉体があるのでね、残念ながら効かんのだよ。」

「攻撃のため…じゃなくて防御のために体を鍛えたの？」

「そうだ。もともと雷に打撃攻撃は向いてなしな。そんなことどうでもいいんだが…！」

そしてガラクは容赦なく雷撃を放った。その攻撃は再びキハクを襲う。恐ろしいほどの電撃だ。魔術着がなければおそらく即死であろう。

「うう…よく当たる…正直痛いな…」

「そりゃそりゃ、普通の魔法使いじゃ即死級だ。だがお前は耐えぬいている。大したもんだ。」

「褒められたのか？ありがとな。」

「そりゃ、どうも…」

しかしガラクは力を緩めることはなかつた。再び剣を振り雷球を打つ。キハクはある程度まで火球で対応、そしてバリアを開拓し攻撃を防いだ。

「バリア正直せこいかな、なんて思つてたけど…まあいいや。」

「ん?なんだ?」

「言つたままの意味。」

「それは、どうも…だな。」

「俺がお前を舐めてたみたいだ。時間がないのでな。だから、こちらも本氣で行くよ。」

キハクの剣が再び青色に輝く。

「火球と竜巻が効かないんだつたら、これはどう?」

キハクの周囲に三つの魔法陣が出現する。そしてキハクは剣をガラクの方に向けた。空気がキハクの剣に吸い寄せられるかのような感覚にガラクは陥った。そのとき本能が己の危機を感じさせた。

「貫け……」

キハクの剣の先端から鋭い槍の形をした炎が放たれた。ガラクは咄嗟に巨剣を盾代わりにし攻撃を防ごうとした。

「それ貫通するから。」

ガラクの巨剣にヒビが入り粉々に砕け散つた。

それと同時に結界が破れ異世界が消えてゆく。

そして、青空が戻った。

「5分か、サクラ…耐えていてくれよ。」

地上にはガラクが無残な姿で横たわっていた。死んではいないうである。

神を目指す意味

「はあはあ……」

サクラは限界を感じていた。周囲の炎は体力だけでなく魔力をも奪つていく。

「あーあ、退屈だな。」

ラサはまるで焚火でも眺めるかのようにサクラのもがく姿を体育座りで眺めていた。

「あー、無駄無駄。動くはずがない。そんなにもがいても早死にするだけだよ。」

「でも、このままいたらやられる。」

「そうだよ。」

「だったら、もがいて抜け出して……」

「だから、無駄だつて。」

「抜け出すから…絶対…！…そつじやないと神になれない…！…！」

サクラにとうとう限界が訪れようとしていた。視界が狭まり、地面が揺れているように見える。立っていることが不可能な状態だ。意識がはつきりしなく自分が今どうしているのかわからなくなつて行く気がした。

「ちーて、そろそろかな？」

「私…私は負けないっ…！…！」

「頑張るね、そんなに神田指したいの？私だったら降参でもして部下にでもならせてって言つんだけど。」

「さうね…神を田指せず部下として働くあなたには分からぬかもしないね。あなたは神を田指せなくていいの？」

「わたし？わたしはそんなことどうでもいい。アリス様の指示に従

うだけ。」「

「そり…なの…、でもね、それじゃあ、つまらないでしょ?私は嫌だね…、神を目指さなきゃ、ならないから。それが私の使命。神を目指す意味…」

「使命?意味?」

神を目指さずただ上司に従うだけのラサにはまったく理解しがたい言葉だった。神を目指す意味、使命など考えたこともない。いや、考える必要がなかつたのである。そもそもアリスがなぜ神を目指すか知らないし知ろうとは思わなかつた。アリスとラサは父親の会社縁の関係。だから、ラサにはどうでもいいと言つてもいいものである。この戦いの存在 자체もは…

「あなたには、戦う意味とかないの?」

「ない。」「

「じゃあ、なんで戦うの?」

「アリス様のため。」

「そのアリストであなたにどうしては何？」

「ボス。」

「なら、どうしてボスのために戦うの？」

「命令だから。」

「ラサには…命令、それ以外にない。この戦乱で戦つ」とは父とアリストの命令、それしかない。

サクラはそんなラサが少し気にかかった。言わなければならぬ気がした。戦う意味を…神を目指す意味を…

「それだと、あなたは戦っている意味がない…」

戦う意味、それなしでは戦つてはならない。たとえそれが主君に仕える部下であつても。しかしラサは

「戦いの意味なんて必要ないんじゃない？ただ敵を殺すだけ。」

「それもやうなのかもしない…でも、それはあなたをあなたでな

くす…

「私じゃなくなる?」

「あなたはただ、命令に沿つて戦う。ならそれはあなたじゃなく、アリストの意思。だからあなたじゃないの。」

サクラは熱に溺れそうになりながらも必死に語りかけた。ラサにとつては全く意味が分からない。この戦乱における自分の意思、そんなことなど知る由もなかつた。ラサにとって今の自分はただの一つのボード上のコマにしか過ぎない。だから意思など不要なのだ。

神を田指す意味、戦いの意味、自分の意思…

そんなものはラサに存在しない。

しかしサクラは違つ。主君でありながらも敵である主君の部下に戦う意味を聞いた。彼女は意思を戦う意味を尊重しようとする。

ラサにとつての神を田指す意味、戦いの意味、自分の意思を聞き出そうとする。

だが、なぜか…なぜ、部下や敵にそれを求める?

それはある事件が絡んでいた。

戦う理由、神を求める理由…それがなければ神を求める資格がない
…彼女の思想…

『クミリア魔法小学校生徒殺害事件』

これが彼女…サクラの戦つ意思と神を田指す執着心の源であるのだ。

「…ねえ…教えてあげよつか、私の神を田指す意味を…」

サクラはラサに神を田指す理由を言つことを決心した。

「神を田指す理由…それは…今から約10年前のこと

* * *

私の通う魔法小学校で起こった一つの殺害事件…

深い傷を残した

忘れるうことのできないもの

正直はつきり…覚えてない。だから彼をと呼ぶ：

「あなたのお名前なんて言ひの？」

「僕はて言ひ名前。」

「？いい名前ね。」

すべてはこの出会いから始まった。

この世界のどこにある私立クミリア魔法小学校。そこにいた私と。

私は3年2組で同じクラス。日本人が少ない魔法小学校だったからクラスには私としか日本人はいなかつた。は2年生の時に転入してきたみたいでクラスが違つたから話す機会とかなかつたけど、3年生になつて運よく同じクラスになれた。最初、話そうとしてもうまくいかない。緊張してしまつから…何故つて？好きだつたから。が。

は同じ日本人だつたけど、ただの日本人じゃなかつた。優しくて綺麗で魔法も上手くて、本当に憧れを感じずにはいられなかつた。

家も近くだったし、そのうち会話ができるようになつた。

そして毎日一緒に登校して一緒に下校して一緒に遊んだ。

魔法小学校の授業は楽しくたくさんの方達がいた。はつきり覚えてないけどMという友人がいた。Mは私にとってとても大切な友人。ロシア人のMの髪は金色に青い美しい目が輝いていてクラスからも大人気の女の子だった。Mは学校内でも優秀、信頼も厚くクラスの中心人物みたいな存在。

それに比べ私は魔法が得意でもない、授業のテストの出来も今一だつた。でも、Mは私に優しく魔法や勉強を必死に教えてくれた。

担任のW先生もすごく優しい。魔法が苦手な日本人だからと言つて差別なしに丁寧に分かり易く楽しく私に魔法を教えてくれた。

そつ…小学3年生の私はとても幸せだったの。

私は のことが日に日に好きになつていった。

は私のことどう思つて いるか知らない。

でも話せば話してくれるし、あそぼって言うと遊んでくれた。だか

うそれでよかったの。魔法とか勉強とかビリビリにこへりこだつた。

はおとなしい子だつたけど優しい子。みんなに優しくて、みんなと仲良くなれた。

は日本人なのに魔法はずば抜けて優秀だつた。
私は大違いで、私には優しくしてくれる。

このまま幸せな日々が続くと信じていた。

一つ聞いた。聞いてしまった。それは

のことがMも好きだということ。

でも、そんなことどうでもよかったです。私も 好き… それはそれ、
Mが 好き… これはこれ。

だから といつも通り一緒に登校して一緒に遊んで学んで一緒に下
校した。

そのうちは私がから距離をとるようになっていた。

私が　と仲良くしてるとMは私に対していじめをするようになった。
と仲良い私が気に入らなかつたみたい。

Mは魔法が優秀であつた上クラスからの信頼もあつたから、私はクラスから除外された。

Mが嫌う人物はクラス全員が嫌うべき人物。
日本人は　と私しかいなかつたからもはやどうすることもできなかつた。

昨日まで話していた友達が友達でなくなる日々が続いていった。

だからMに言つた。なんどそんなことをするのかつて。
を独り占めして楽しくしているから罰を与えてあげてるのって言
われた。

クラスメイト達によるいじめは深刻化した。最初は机の落書きとか
靴を捨てられるとかその程度だったけど、そのうち蹴られたり、頭
の髪の毛を引っ張られたり、物を投げられたり…傷跡に両親は不安
がつたけど鬼ごっことかで転んだって言い訳して心配させまいと子
供ながらに思いなんとかした。

でも、いじめが消える気配がなかつた。だからW先生に相談した。
毎日いじめられてると…

先生は私に黒い小刀を貸してくれた。

これでいじめる奴に仕返しなさいといった。

先生は優しく言つたけど、でもよく覚えてないけど怖かつた。その
刀はただの刀ではなかつた。武器として使える刀…

つまりは刀を手にしたから私は魔法が使える…ということだ。
でも仕返しはよくない。

私は悩んだ。今でも は私に優しい。だからいじめられていてもこ
のままでいいのだとも思った。

でも…

でも…

いいんだ。

でも…

でも…

でもね…

は…裏切ったんだ。

はいじめられている私を避けるようになつた。一緒に登校していくなくなつた。あそんでくれなくなつた。

そして…と仲良くなれるよくなつた。

クラス内のいじめはひどくなる一方だった。

『「ミ 扱いされたり、踏みにじられたり…

信じられなかつた。悲しかつた。辛かつた。痛かつた…心が。いじめのこともそうだけど、がいなくなつたことが何よりも辛かつた。

完全に孤立した。

優しかつた、いつしょに遊んでくれた、いつしょに登下校した
、
…私の好きな。

もうこない…だから…

幼かつた私は刀に乗っ取られた。感情のまま意思が働き行動に出て
しまつた：

魔法を使うものが魔法を扱われるものに扱われる。立場が逆転した。

「Mちゃんは私をいじめる子……」

「Mちゃんは私の邪魔な子……」

「Mちゃんは私のことを奪った子……」

「は私を裏切った……」

「はでない……」

だから……

「Mちゃんはなんでいじめるの?」「

「それは私がと仲良くするから?」

「Mちゃんは私のことも嫌い?」

仕返ししない……

大丈夫。ワタシが黙つておくから。ワタシが何とかするから……

そのあと、よくわかつたけどW先生は闇系統の極悪人だったの。

W先生のささやきが小刀から私の体に侵入した。その声に惑わされ
体が勝手に動いた。

悪い奴を仕返しするためには、悪い奴を排除するためには、

「Mは悪い子、いけない子。を奪つたいけない子。」

夜の学校の裏庭で、誰もいないこの場所で、Mと私は一人でいた。
どうして一人になれたかはわからない。でも、目の前にMはいた。

Mがいるからいじめられる。Mがいるから がいなくなる。だから
……だから……

刀をとった。

Mガイナケレバイイ。キエレバイイノダ、トワタシノタメニモ

無我夢中になつて無言のまままるである種の作業のよひに

Mを殺した。

切り刻んで、真っ赤にした。暗闇でよくわからなかつたけど…
泣き叫んでいたかな、やめてつゝ言つていたかな、よく覚えてない
けど。

でもね…

倒れていたのは…

Mじゃなかつた。

私が切り刻んだのはMじゃなくMを庇つた だつた。

ワケが分からなかつた。

なんで　が、なんでMを

庇う？なんで私じゃないの！？

は言つた。

「君は人殺しをするような悪い人じゃない……君は優しい人だから……」

優しい人……？意味が分からない。なんで、どうして……！

は暗闇の中、真紅に染まつた顔で微笑み目を閉じ……

好きだつたのに……あんなに楽しかつたのに……
全てが幻のように感じられた。

泣いた。叫んだ。そして狂つた。　を抱きかかえた。しつかりと抱
えた。もう離さまいと。

でもね…私たちの答えは、デアワナケレバヨカツタ。

気が付くと私は日本の病院にいた。

その記憶はあいまいなものになっていた。夢かとも思った。Mの名前…の存在…すべてがわからなくなっていた。魔法小学校にも行けなくなつた。

その事件はW先生が私の心に侵入し操つて起こつた事件だったみたい。犯罪に使われた刀もなくなり、W先生がどうなつたかも知らない。けど、がいなくなつた事実は変わらなかつた。

だから、神になつて、生き返させる。
それしか方法がなかつたから…

* * *

「これしか方法がないの……。神になつて を生き返させ、共にこの戦乱で散りゆく命を救う。これが私が戦う理由。神を口指す理由。だから、だか……」

サクラの意識がついに限界を迎えた。

しかし、

炎が消えた。膜が消えサクラの体が楽になり身動きが取れるようになる。サクラは思わずその場に倒れこんだ、が意識はあるようだ。思わぬラサの行動にサクラは驚愕する。ラサは言った。

「なんかよくわからないけど、私にまだひとことだけビ、あなたを殺す気がなくなつた。」

「…エウニハレヒヘ。」

「ラサに」と云はばり「ラサ」ともない、ただ純粹に戦いたくなくなつたのである。サクラの話を真剣に受け止めたわけではないが、何故か自分の存在が小さな存在に見えてならなかつた。

「そのままの意味。まあ、私には戦う意味とか分からぬけれど。」

意味など分からぬ、分からぬとも思はないのだ。そもそも考えたところで意味などない。

それがラサである。命令に従うだけ…

しかし、少しだけ、ほんの少しだけ考えたくなつた。戦う意味を…従つ意味を…

ラサは一歩一歩とこの場を後にしていく。

「ちよっと……どうこう」と…。

「あと、三分で結界が解けるから武器閉まつておきな。」

「あなた…！」

ラサはサクラの視界から消えこの場から消え去った。

「キュウ……少し憧れるかも……」

まあ、どうでもいいんだけどね……

不可思議の国のアリス

「…………？」

気が付くとサクラはベットに横たわっていた。
何やら回復系統の魔法をかけられていたらしく気分が良い。

「ん？ 気が付いたか。」

キハクの振り向いた立ち姿がぼんやりとサクラの皿に映る。

「あれれ、私……なんでこんな……疲れが……」

「ああ、そうだろうな、俺が行ったときはボロボロの上高熱で完全にアウトだったからな。城之崎さんと沢井さんがあたふたしてたぜ。」

「…………ああ……そうだ……私……戦つて……」

「やつぱり、敵襲にあつたんだな……」

キハクは分かりきった様子で言った。両手に紅茶の入ったマグカップを両手に持ち、左手のカップをサクラに渡した。サクラは上半身を起こしそれを受け取る。キハクはカーペットの上に座り紅茶を飲んだ。

「また炎使いの魔法使いだつたよ。」

サクラはため息をつきながら言った。つくづく運がないのかもしない。初戦の相手が苦手な炎使いであり、一戦目も炎使い。相性を覆すにはやはりそれなりの実力が必要となる。相手が弱いのであれば話は別だが、今のところ強豪ぞろいのようだ。

「で、勝てたんだな？」

「それが…」

もしも勝つていなければサクラは死んでいるか、魔法が使えなくななるか…しかし彼女は死んでいないし魔法も使えなくなつた気配は感じ取れない。つまりは勝利したということだが…彼女は勝利していない。

サクラは事情を説明した。ラサとの戦いを。

「それはつまり…敵が見逃してくれた、ということか？」

「そうこう」と、なのかな?」

キハクは理解しがたいと難しそうな表情を浮かべる。

「珍しいな。そんなこともあるんだな。」

追い詰められたがこちらの話を聞き見逃してくれたラサという人物には感謝するしかない。そんなことはまず絶対ないと言える事態だが。

「うん、感謝しなきゃね…、でも、一つだけ分かったことがあるの。

「

「なに?」

「敵襲にはあつたけど、そいつにはボスがいるって話。」

「ああ、アリスとか言つ奴だろ?」

「え? なんで知ってるの?」

「俺も敵襲にあつたからな。」

「キハクも！？」

ガラクというキハクの相手も言っていた。彼らのボス、アリスという存在を。どんな敵か、戦術か、属性か…まったく詳細が分からぬ敵だが部下を有するだけあって油断はできない。ガラクはキハクに敗れたが弱い訳ではなかつた。

「ああ、ヤツは電気系統の魔法使いだったけど。まあ、勝てたからね。」

「勝てたんだ。でもキハクを狙つたつてことはキハクが私の仲間だつて知つてたつてことだよね。」

「そうだな。なんか優秀な情報収集者がいるんだけど。」

「ふーん、情報収集者ねえ…」

「どちらにせよ、また敵襲が来るのは分かりきつたことだ。それなりの対応でもしなければな。」

「うん、そうだね…」

キハクが気になるのはアリスはもちろんその情報収集者だ。ファルとの戦い、サクラとキハクの情報、いくらなんでも早すぎる。となればその人物は相当の実力者と言えるのでは?仮にそいつを倒せたとしてもアリスはそいつのボスだ。実力者を超える実力者、果してそんな相手に勝てるのだろうか。サクラとキハクのようにボスより部下の方が強いというケースはめったにないのだ。

サクラは紅茶を飲み終えキハクがカップを受け取った。

「疲れただろ?回復術と言っても限界がある。応急処置にしか過ぎないからな。無理せず休んでな。」

「ありがとう… キハク。」

サクラは再び眠りにつこうとする。ラサという少女が気になつた。あの時、何故か分かりあえた気がしたのだ。分かりあえたのであればもしかしたら仲間になれるのかも知れない。そんな事を知らず知らず考えていた。

ガラク、ラサとの戦いの後は思いのほか何事も起ることはないなかつた。サクラは完全に回復し、学校生活も普段通りであった。（キハクにとってはサクラとの関係の噂…ラサとの戦い後アズナとモミの間を割つてサクラを連れて帰つたことがまずかつたらしい…。その他、相川の視線が気になるが。）

日が過ぎていくうちに敵襲に関する緊張感がぼぐれていきサクラに至つてはもはや戦乱そのものを忘れているかの様だった。仮にもキハクの主君、しっかりともらいたいがキハクとしてはそんなこと気にするような性格ではないしサクラが楽しんでる姿が何故か一番だと感じていた。

キハクは時より妙な気持ちになる。同居生活のせいいか以前よりサラを必要以上に意識するのだ。休み時間も気が付けばサクラを眺めている。これは一体？ 考えても仕方ないと彼は深入りはしない。だが、やはりサクラが気になる。

そんな中、一通の紙がキハクのもとに訪れる。それは学校の図書室からの本の請求だつた。正直キハクが本を借りた覚えはない。何かの間違えだととりあえずは放課後図書室を訪れることにした。

最近の登下校はハル、サクラ、キハクの3セットであった。ハルがサクラとキハクの関係に関心を持たずサクラがキハクの家に毎朝食事をしに来るという意味不明な行為の言い訳を素直に受け入れてくれたことには感謝してもしつくせない。この日は珍しくハルは用事があるといい先に家に帰ることになり、サ克拉と一人つきりで図書室に寄つた後に帰宅することとなつた。係りの仕事があつた関係で図書室を訪れるのは夕方5時となつてしまつた。

彼らは一階の一番西の教室にある図書室に訪れた。しかし行つたのはいいが明かりが付いておらず開室しているような様子はない。ただ戸が開いていたので一応一人は入室した。図書室長がいるかもしれないと思ったのだ。

「あのー、大咲ですが、図書室長さんはいらっしゃいませんか？」

しかし、返事などない。やはり図書室は休室のようだ。夕日が明るく室内を真つ赤に染めている。

「休みみたいね。また明日来よ?」

「そうだね。明日行くか。」

キハクとサクラは図書室を出ようとした。

しかし、その戸が無遠慮に音を立てながら勝手に閉まる。人の気配が何一つ感じられない。キハクが戸を開けようとしたが鍵がかけられたの如く力いっぱい開けようとしても全く開く様子がない。そこへ

「開くはずないですよ。この部屋の中、結界張つたから。」

聞き覚えのない少女の子供じみた声がサクラとキハクの背後から聞こえてきた。二人ははっと後ろを振り返る。すると金髪に青い瞳、美しい小柄のキハクたちより少し若そうな少女が白いワンピース姿で図書室の窓際の机で本を広げながら椅子に座っていた。周囲は薄暗くなり夕日は雲に包まれる。

「君……俺たちに何か用でも？」

「用があるにはあるけど、まずお礼を言いに来たの。うつのガラクとラサがお世話になつたからね。」

少女は本を閉じ左手に持ちゆつくりと立ち上がつた。そう彼女は… サクラは言った。

「…といふことはあなたがアリストで言つ…」

「やうよ。でも私の名前知ってるなんてね。やっぱりおしゃべりね、あのバカお一人は。ラサの方は帰ってきて説わかんなくなつてたら抹殺してあげて正解だったみたいね。」

サクラにとっては信じがたい言葉だつた。

「抹殺つて……あなた、おかしいんじやないのー? 仲間をなんだと思つて……」

「使えない部下は始末する。これのビームがおかしいのです?」

「へへ…」

一度は分かりあえたかもしれない敵が敵の仲間に殺された。サクラに怒りがこみ上げる。

「サクラ。まあ、落ち着け。んで、そのアリスさんだかは今から俺たちどうしょつかと?」

「やうね…どうすればいいかな…シオ?」

本棚と本棚の狭い通路から長身の赤髪の男が現れた。キハクは睨みつけて言つ。

「なるほど、優秀な情報収集者とはお前のことか。」

「ふふ、そうだ。初めまして、とでも言つておくか。大咲綺迫、杞憂桜。」

「二人だけか?」

「そうだな、もともと4人組でやつていたからな。2人減つて2人組。ちょうど2対2。」

「それで、戦うのか?」

「まで、一つ話を聞け。」

「話だと?」

「そうだ。それはだな、俺たちの部下にならないか?炎の暗殺者とガラクを倒し、ラサに反抗させる気を持たせたお前たち。俺的には

「気に入っているからな。」

シオに続きアリスが言つ。

「やうこいつ」となのです。つまりは今日は仲間になろうべの「招待
にきたんだす。」

「キハク…。」

サクラは不安げにキハクを見たがキハクはためらひことなしに言つ
た。

「そりか、もじこいで俺が嫌だと言つたら?」

「それはもちろん倒す予定だが?」

「やうれるのが嫌なら仲間になれと?」

「やうこいつとだ。」

「大した自信だね。しかし皆仲間集めに必死のこと…。だが、仲間

がほしにってことは自分に自信がないってことだろ?俺も仲間が欲しいとは思つたさ。だがそれはサクラが主君として認める仲間。お前たちの仲間や、部下になるつていつのは主君がアリスといつわけだ。それは御免だよ。」「

キハクの言葉に対しアリスはため息を吐きゅつくと口を開く。

「えーと、それはつまり私たちとは手を組まなつていつで…ですよね?」

「やつこつじだが…サクラ良いよな?」

「うん…もちろん。」

「やれやれ、仕方ないですね。なら、」
「ひまは遠慮なくこせまよ
?」

アリスは魔法杖を出現させ、魔法陣を描いた。

そして空気中の水蒸気が凝縮され5つの水球が空中に出現した。

「墜ちなさい…。」

水球はキハクとサクラのもとへ勢いよく放たれた。キハクは長剣、サクラは大剣を出現させ各人魔術着に身を包む。そして見事な身こなしで攻撃をかわすのだ。

「避けたか、ところで俺がいることを忘れてはいないか？」

瞬時にキハクの目の前にシオが現れ両手に持つ双銃をぶつ放した。その銃弾はキハクに直撃したが見事に魔術着によりはじかれた。

「ほう、魔術着とは思いのほか強力な物のようだ。」

シオが放った銃弾は弾というより魔弾と言った方が適切であった。地の属性が入った魔弾。すなわちシオは地属性のようだ。それに対し水を放つたアリスはおそらく水属性であるだろう。

「キハク!!」

サクラは力いっぱい剣を振り上げアリスに攻撃を仕掛ける。しかし、見事にかわされた。

「なに、それで避けたとでも？」

サクラの大剣の振りかぶった跡が鎌状になり空気の刃を作り上げた。アリスは水でできた盾を出現させ、その刃と衝突させる。鮮やかなほどに水と空気の刃が跡形もなく拡散、飛び散る。

「葉のくせにして空気…いや風を操るなんて、面白いですね。」

「それはどうも」

サクラは二コリと微笑む。するとアリスの足元に緑色をした魔法陣が光を放ちながら出現し植物の触手状のツルが4本飛び出た。そのツルをかわしたアリスは空気中の水分を利用し無数の氷の刃作りそれらをばら撒きツルを切り裂いた。

「私、水属性だけどね、水温調節ができるから氷も放てるんだ。」

「へー便利ね、特に関心とかないけど。」

「あら、関心ゼロですね。」

「やうなことよつ…も」

今度はサクラが木の葉をばら撒いた。その木の葉は投げナイフのよ

うにまつすぐとアリスに向かって飛んでゆく。

「ですが……」

木の葉が氷つき重量により虚しくすべて地面に落ちていった。

「私の氷は物体にも付きますからね。」

「だからーー？」

キハクの青い火球が目にも止まらぬ速さでアリスに放たれていた。
が、シオの魔弾により跡形もなく撃ち消された。

「はいはい。よそ見しない。俺の相手は大咲綺迫、君なのだから。」

「チ……。」

キハクが炎を天上に向けてうちはなつとそれは空で花火のように拡散した。

「サクラーーー！」

キハクの叫びと共にサクラは風を作りシオの方へ疾風となつて襲いかからせた。その風に乗つて火花が雨のようにシオに降りかかる。その隙にキハクはシオの右手の銃を剣でうまく切り裂いた。そしてサクラが素早くシオの体、左手を押さえつけ植物のツル状の触手を胴体から出現させもう一つの銃を取り上げた。触手はサクラの体からも出現可能のようだ。それにしてもナイスな連携。

「つまりは……お前を倒したら、よそ見していいんだよな？」

「やつこいつ」とでしょう？あなたの言葉の意味は？

サクラの触手が力強く握りしめその銃を粉々にした。

「右腕、切らいで武器壊すの苦労するんだから、礼ぐらいと言えよ。

」

力を失つたシオはキハクの方に視線を送つたが間もなく意識が消えその場に倒れこんだ。

「ふーん。シオさんの負け！…ですか。なんと呆氣ない。」

「そうね。残るのはあなただけ。仲間がいなくなつて不安にでもなつた?」

「そんなことはないです。」

「?」

「あなた方に仲間が他にいよつとも恐れてはいません。だつて、仲間なんてそもそも私には不必要つて言つても過言ではないですから。」

「

「仲間がいらぬ?」

「ええ、シオさんは別格でしたが……。他是父の縁で来たただのおまけ。だからラサの抹殺も何とも思わないでできぬの。」

「どうして? ……?」

「この国の昔話は面白いですね。今日はこの桃太郎っていう童話を読みました。食べ物につられて仲間ができる、それで強豪を倒すつて話。でもね私にかかれば仲間なんて……」

アリスは桃太郎と書かれた本を左手に持ち開いた。右手の杖で魔法を唱える。すると…

本から光が放たれた。そして黒い渦が出現し、そこから狂暴化した体長2メートルほどの鳥、獣、狼が出現する。

「これは？」

キハクは驚愕した。その三体、それは桃太郎の話に出てくる雉、猿、犬と一致していた。

「そう、私はね。簡単な話の本の登場人物を具現化できるの。桃太郎に出てくる登場人物…まあ動物だけど、それをね出したの。でもこの話の動物はいくらなんでも戦力不足…。でも、それを強化する力が私にはあるんです。」

「それはそれは…厄介だね。」

「という訳で犬さん、雉さん、猿さんやつちやつてください。」

キハクとサクラのもとへ信じがたいほどに狂暴化した三匹が襲いかつた。犬はもはケロベロス的存在、雉は鳳凰とでも言うべきか、猿はもはや原型が分からない存在…であつた。正直絶望するしかない状況だ。

「もしかして、子供の時の楽しい思い出でも思い出して楽しんでいらっしゃるんですか。」

アリスは優しそうな笑みを浮かべたのだがこの状況にキハクたちは笑えるはずがない。

「そうだな、思い出しても楽しめやしないだろ。なあサクラ？」

「そうね……。動物つていうよりもはや怪物つて感じだし……」

犬が牙を剥いた。キハクを食いちぎる勢いで周囲の机や椅子を粉々に粉碎しつつ迫る。身軽なキハクは犬に立ち向かい真向勝負を仕掛けた。宙に浮き剣を構え犬の顔面を引き裂く。血が出ることもなくかすり傷が付いただけだった。そして犬の鋭い爪が凶器となりキハクを切り飛ばし彼は宙に舞う。

「ぐう……！」

怪物は想像以上の強さだ。もしかしたら魔法を唱えたアリスに匹敵するのでは？キハクは左肩から出血を伴つたがやられた訳ではない。体制を立て直し宙に舞つた状態から再び犬に襲いかかる。サクラは風と葉を操り鳥に攻撃を放つが鳥が翼で作り上げた突風に負け無効化される。その風により図書館内の本や椅子が飛ばされサクラたち

に迫った。キハクの火球がそれらを打ち碎く。その間に猿は本棚ごと持ち上げキハクに投げつける。サクラが大剣でそれを切り碎いた。それにしてもさすが桃太郎、こちらもなんという連携攻撃か。

「すごいですね。桃太郎。でも、あなた方もいいカップルですよ？」
桃太郎の仲間相手によくできますね。」

「桃太郎の仲間というより、ただの化け物に近いがな。だが、桃太郎にしなくて他の本からもっと強い奴を具現化した方が効率よくないか？」

「ええ、それはもちろん。でもね、私はまだそんな能力がないの。できるのは簡単な民間童話の登場人物を自分と同じ能力にしてだすことぐらい。それでも十分ですけど。」

「それはつまりこの三体は皆お前と同じってわけか？」

「そうです。だから、かなうわけないでしょ？」

唸り声と共に犬がキハクに？みつきかかった。キハクは避けることができたのだが後方から猿が爪を立て迫ってくる。する術もなくキハクは背中をざっくりと切り裂かれた。

「はう……」

痛みが全身にこみ上げた。傷は思いのほか深い。キハクは倒れてしまった。倒れこんだ彼の背中からは多量の出血がみられる。

「キハク!?

「あら、もう終わりですか? シオさん同様、思つたより呆気ないですね。」

「あなた……！」

サクラは全速力でアリスに迫った。ラサの件といいキハクのことといい、とにかく怒りにまかせ剣を力いっぱい振り上げるが、左方から鳥の足がサクラを蹴り上げ倒れこませる。

「無駄無駄。」

アリスと同じ実力の野獣が三体もいるのだ。勝ち目はサクラたちに乏しいものである。この状況を打破するには……?
ところがキハクが左肩に手を当て止血しながらゆっくりと立ち上がった。彼は言つ。

「分かつた。分かつたぞ。お前の弱点。」

「！？」

「お前はこいつ等を出してから一度も水属性魔法を使っていない。その能力は思いのほか自分に負担がかかるのではないのか？」

「ですから？」

「だから、この三体がこの世に存在する限りお前は水魔法が使えない。」

「それがどうしたのですか？水が使えないともこの三匹がいるのですから問題はないでしょ？」

「ああ、だがな……！」

キハクはアリスのもとに真っ向勝負を仕掛けに行つた。力を振り絞り俊足とも言える速さでアリスに急接近し、炎の竜巻を打ち当てた。直撃した…ようにも思えたがアリスは傷無しに平然としていた。

「私を先に倒してしまえば良いって考えでしょ？でも、あまいですよ？私は魔法が使えないって言つても攻撃ができないだけで動きは速いのです。」

「分かつてゐる。だが……」

キハクがその場に倒れ失せた。と同時に猿、雉、犬の三体が消えうせたのだ。アリスは訳が分からなくあたふたしている。

「で、手元をよく見てみろよ。……あとは……頼む……サクラ。」

キハクは完全に気を失った。

アリスは急に熱いと言つて本を投げ捨てる。見れば青い炎が本から上がつているのではないか。キハクの考えは的中した。そう、猛獸はアリスの持つている本から出現、ならばその本、文書を抹消してしまえば猛獸は消えるのだ。

「考えたですね。」

「うちの仲間を甘く見ないでもらいたいね。」

「あーあ、これでもイギリスではトップ₅に入る実力があるのに……」

「あらら、強いわけね。」

「うん、でも私はですね！！」

アリスが水球を作り上げた。サクラは風が吹き始め多くの木の葉と桜色の花びらが舞った。

風に圧倒され水球は脆くも弾けていく。先ほどとは打つて変わった。

「どうやら、力を使いすぎたみたいね…」

アリスの魔力は思いのほか失せていた。よっぽど具現化に力を必要としていたのだろう。

「残念ね。」

木の葉と花びらは刃物のように鋭くなつた。そして容赦もなくアリスを襲う。手足には多くの切り傷がアリスに刻まれた。

「痛いでしょ？その杖を渡してくれれば助かるんじゃない？」

「そうね…」

「渡す気…あるの?」

「あなたが許してくれるなら…」

「正直許したくはない…、でも戦乱だから仕方ない…」

「許してくれ…ですか?」

「もううん。」

「うふ、ありがとう…でも…でも、あなたに降参するくらいなら、殺される方がマシですね…死ぬのはあなたですけど……」

アリスの右手の魔法杖の先端が氷の槍状になつてサクラの胸を狙いアリスが飛び出した。しかしサクラは素手でアリスの右手を抑える。そしてアリスの周囲には無数のナイフ状の木の葉が出現し浮遊したまま彼女の首筋を狙う。

「殺された方がマシって、何よ…。」

サクラは力強く言った。彼女の目は真剣そのもの、堪忍袋の緒が切れたという奴か。

「殺される、死ぬことよりもマシなことなんてないんだから。あなた…ラサの気持ちわかつていたの？彼女の悩み、つらさ。彼女はね戦う意味が分からぬのよ！？戦いたくとも思つていない！？それなのにあなたのために私と戦つた！！まあ…彼女を平然と殺すようなあなたにはわからないでしょうけど。」

「？」

「…命より大切なものはないんだから。だから私は決して敵を殺そ
うとしないキハクを尊敬しているし私もそうしようと頑張つている。
あなたも分かつて、大切なのは勝ち抜くことより命を守り抜くこと
だと…」

「何ですか？意味の分からぬことを言わないで。」

「分かれつて言つてんでしょう…！」

「はっはあ…そうですか。なら敢えて言わせていただきます…それ
だと、あなた矛盾してる。だって、勝ち残るには、命を守り通すに
は相手を殺すしかない。そんな武器破壊なんて器用などばかりし
ていたら、いつかあなた…」

「さうだとしても、私は……私は神になつて人を……助ける。だからー。」

「それが目的ですか？あなたは綺麗事が好きなようで……」

「綺麗事つて……」

「だつてそうでしょ？この戦乱は魔法使い……いや、人殺しが前提。この戦乱に参加した限り人を救つていうのはただの綺麗事。」

「綺麗事だとしても私は……これが使命だからーー！」

この状況見れば明らかにサクラの勝利だ。サクラが合図すればものの一秒でアリスの首は木の葉によつて切り裂かれてしまう。沈黙が流れた。そんな中アリスが口を開いた。

「でも、そんなことは無理なの。」

「何故？」

「私が神になるから。私が神になつてママを生き返らせるんですか

「うーーー！」

「あなたの……お母さん……を？」

サクラは驚愕した。まさか敵の……アリスの目的が親を生き返りすと
いうことなど思う由もなかつたからだ。

「そうよ……そうよーー！私だつて殺したくない、でも殺さなくちゃ神
になれないーー！だから使えない仲間は切り捨て敵は早めに排除する。
そうするしかないでしょーー！じゃなきや、私がやられる。じゃなき
や、神になれない。そうでしょーー！それ以外方法なんてないんです
よーー！」

アリスの本音が出たようだ。考えてみればまだ幼いけな気な少女。
そんな彼女が安易に人殺しなどしたいと思つはずなどない。
だが、サクラは…

「それは間違いよ。」

「え……」

「人を殺して神になつて、お母さんを生き返らせたところであなた
のお母さんは喜ぶの？あなた一人の幸福のために何万人もの人を不

幸にやせぬ……それが望み？あなたの蜘蛛さん……いや、あなた自身の……」

「……力があつても最善の道など歩めるはずない。」

「違う。歩めないんじゃない。歩むつとしないだけ。自信がないから」

「自信つて……ふざけないでください……。」

「ふざけてなんかない……。真剣よ、私。私はこの戦乱で失った命を、助けられなかつた命を呼び戻すために戦つているの。だから……！」

「だから……？」

「綺麗事だらうが押し進む！神を手描して……」

「そう……なり……」

アリスはサクラの手を振り払つて檜上の杖を振り上げた。

そしてその杖を振り下げ

：自分の胸に刺した。

「え…？」

サクラの声も虚しく真っ赤な血を派手に拡散させながらアリスは口から血を吐き微笑みながら倒れていった。意味が理解ができなかつた。アリスの突然の行動にサクラは彼女が壊れたのでは、とても思つた。倒れた彼女はその妙な微笑みのまま…言つた。

「…その綺麗事を貫き通すなら…、あなたが本気ならば…。私と私のお母さんを生き返させてみてください。私はここでの勝ち目はありません…。だから期待します。どうまでその綺麗事がこの戦乱で通用するか。」

アリスは負けを確信したのか、それともサクラに託したのか。まったく不明であるが仲間になるという考えはなかつたようだ。アリスは静かに息を引き取り光の粒となつて消える。魔法使いは死体が残らない。そうでなければ戦乱のこと魔法使いのことが世間に広まつていく…

気が付くと夕日が差し込んでいた。先ほどまでボロボロだった図書室はいつも通りの綺麗な図書室に戻つてゐる。どうやら結界が消え異世界から現実世界へ戻されたようだ。

サクラの田の前に倒れるキハクとシオ。サクラはあわててキハクのもとに駆け寄つた。

戦いは壮絶なもの。武器が壊され魔法が使えなくなつたものはもはやただの人となる。

深夜一時。静まり返つたこの町に一人の男が夜道をゆっくりと歩く。

「ふふふ、この俺から魔法を奪つた責任はちゃんととつてもらひついでいるわい！」

それはシオだつた。住宅街を彼は奇妙な笑みを浮かべ進んでいく。彼は魔法が使えなくなつたことにいらだちを感じたのか。

「絶対、ゆるさねー。あの二人ー！」

シオのようにわずかながら魔法が使えなくなつたことに怒りを感じ復しゅうをする元魔法使いが存在する。彼の狙いはもちろんサクラとキハクだ。そうこの道はサクラたちの帰宅路なのである。ところ

が

「うちの学校で妙な臭いがしてな、同じ臭いがしたから来てみたが……なんだこのバカ丸出しの野郎は。」

声がした。図太く低い唸るような声だ。そしてシオの目の前には人影が現れる。

人影はゆっくりとシオの方へ歩み寄ってきた。シオは言った。

「なんだ? お前は? 奴らの仲間か?」

「ああ? テメー! なんだ。うちの学校で散々暴れやがって。」

「俺が暴れるのは俺の勝手だろ。大体異世界を作つてやつてるんだ。この世界に影響はないだろ。」

「そういうわけじゃねえ、この町で暴れてもうつちや困るんだよ。暴れられると次々に魔法使いが来やがある。そして気が付きや、あーあ、魔法使いだけの町ですか、はいはい。そんなことになるのは御免。はつきり言う、迷惑なんだよ! そういうの! …」

「ふふ、お前らの目的が何かは知らないが、今の俺は生憎ご機嫌斜めでな。邪魔するなら消えてもらう! …」

シオは瞬時に銃をポケットから取りし、人影に向けた。そしてためらいなしに銃弾を放つた。だが…

「はあ？ ただの銃弾か？ こんなの痛くも痒くもないんですけど。」

「なつ何！？」

「オレは魔法使いだ！！魔法使いに銃がきくとも思つているのかあ？ いい度胸だな。面白いな。ホント、バカな考えだよなテメえは！！！」

人影から雷電が発射された。その雷電はシオの真横を通過した。

「ほら、もうしませんって言えよ。言って、『めんなさい』ってさとこの町から出てけ。」

「くそったれ……が…」

「ああん？」

「くそつたれがあああ！……」

シオは銃弾を連續でぶつ放し人影を狙い撃つが、人影はシオに思いがけない素早さでシオの目の前に飛来した。

「いい度胸だな。笑つちまうぜバカ。だがな、オレ様の言うことを聞かねえとは礼儀知らずもこの上ないだろうがアアア！！ああん！？くそつたれは…、テメエのことじやんかよオ！…！」

人影は大剣でシオを切り刻んだ。大剣を思いがけない速さで振り回して。

シオが倒れこみ人影は言った。

「ん、度胸の割には雑魚だな。しかし久々に魔法を使つたがかなり腕がなまつてやがる。オレこそ雑魚なのかもな。」

夜月を背に人影はこの場を後に再び歩き出した。

この俺、大咲綺迫は母、大咲魅都に命じられ同じ高校に通う葉属性魔法使い桜木桜と契約を結び下部として神の目指す魔法使いの戦争に彼女を優勝されるよう護衛するという役割を担つた。桜木桜は杞憂桜と名前を改めていて俺は彼女の存在に気づくことなく生活をしていたが、炎の魔法使いファルの出現により状況は一変。彼との戦いを通じ主君であるサクラとついに手を結ぶことができた。そしてファルを倒し、これから策略等を考えようとした矢先、アリス、シオによる敵襲である。だが、その敵襲を何とか乗り切り彼らを倒し一件落着というところだ…が、俺にはひとつ気になることがあつた。それは…

「あーあ、余計な買い物してしまった…」

キハクは深くため息をつき今にもあふれそうな白いスーパーのビニール袋を右手にぽんやりと視界に映る赤信号に見とれていた。車の走行音が切なく聞こえるのは気のせいだろうか。太陽がビルの間をゆっくりと西に茜空を作り上げながら沈んでいくのが見える。思わず一番星を探したくなるところだ。

「……元気だして、キハク。」

無邪気な声でキハクを励まそうとしているのはサクラであった。しかしキハクの表情は一向に良くならず、そればかりか目がつりあがりサクラを睨む。

「元気…出せって。2000円で済ます予定がサクラが菓子やらジユースやら牛肉がいいやらで3268円もかかってしまったんだぞ！お前が言うセリフか！おかげでな残高が1700円。これで2人分、2週間、やれると思うか？」

「ぐぐ……それは……。でも、食べたいものがあつたから……」

「生活費、もう使い果たしたから仕方なく俺が出してやつてんの」「あーあ。」

「「めん!…」「めんね!…キハク!…次は私が出すから。」

「次つてより今してもらいたいんだけどな。まあ、言いつても仕方ないが。」

アリスとの戦いから一週間。キハクはサクラの下手な回復魔法のせいで、完治するまで5日を有した。正直あの切り傷を普通に回復するのであれば入院確定なわけだったのだから5日はそれでも早い。優秀な魔法使いなら半日で治せるだろうが。しかしあれから敵が現れない。おかげで平和な日常というものが戻ってきたようだ。だが、相変わらずサクラはキハクの家に泊まり込み、そして生活費は2人で半分半分で出しているのだが昨日サクラの生活費が底をついた。理由は何でも服を無理に高いものを買ってしまったかららしい。キハクがいるからと安心しきっていたのであるつ。

「許してくれるとほ……さつすが、キハク!…」

「喜ぶべきなのか……」

アリスとの戦いの最中キハクは気を失ったためよくは知らないが、それ以来サクラの戦乱に対する意氣込みが全く違っていた。いい傾向なのだろうが、どうして？そもそもキハクはサクラの神になる意味、目的を知らない。母親からの命令では護衛のことしか知られなかつた上、サクラ本人にそのことを聞こうとも思わなかつた。そのこともそうだが、キハクは一つアリスとの戦いで気になつたことがある。アリスの発言についてだ。彼女は戦い中こう言つた。「あなた方に他に仲間がいようとも恐れはしません！」と。たとえ話として使つてゐるなら構わない。だが、やはり引っかかる。他に仲間？彼女には有力な情報収集者のシオがいた。彼ならこの町の魔法使いの数くらい知ることができるだろう。つまりはキハクたち以外に魔法使いがいてアリスたちはその者をキハクたちの仲間だと見なしていたら…。キハクの考えすぎかもしれないが他の魔法使いがいる可能性があるのである。

「他の…魔法使い…か、ないこともないな。」

先ほどの信号を渡り、細い路地に入った。漠然とキハクは歩きながら考えていた。目の前のサクラが鼻歌を歌いながら踊りながら歩いている。

車にひかれないか、気がくるつているのでは等と心配になる以前に彼女がキハクの視界には入らずにいた。この路地はキハクたちの高校へつながる道。キハクの家まであともうすこしといったところだ。そこへ聞き覚えのある声が入つてくる。

「おお、お一人さん。こんなところで。」

「あ、アズナ！！」

彼らの目の前にはクラスメイトでサクラの友人、沢井安須奈がいた。彼女は煌びやかなお嬢様風味な服装で一人のもとを訪れた。そして不可解な視線をサクラに向ける。

「また、大咲といいるんだな。これで付き合つてないとか訳の分からぬことをよくいえるな。」

「どうやらアズナはキハクとサクラお付き合い話信望者の一人のようだ。」

「だから、そんなんじゃないっていつてるじゃない。」

サクラは左手を大きく振り否定のサインを示す。それを見たキハクは自分の存在の必要なさをあらわしているような気がして少々悲しく思えた。

「の、わりには顔が随分にやけてるが？」

「そんなこと、ないって。」

「そうなのか？大咲？」

会話がキハクのもとにやはり訪れた。キハクは黙つて頷くしかない。現にキハクとサクラは付き合つてない、だがサクラは必要以上にキハクに迫る。学校の昼休みの昼食はサクラとキハクのツーショットが日課となつてしまつている。家のみならず学校でもキハクと一緒にいようとするのだ。彼にしてみれば大事な主君が目の前にいることは守る立場として良いことであるが……やはり誤解が生まれてしまう。誤解が生まれると厄介なことこの上ない。噂と化しクラス内の隅という隅まで広まつてゆくのが運命だ。しかし、それでもキハクの手元にサクラが置かれることに反発しないのは彼女の笑顔に彼が癒される日々を望んでいるからなのだろうか。真相は不明。

「んで、アズミ[ま][こ]で何してんの？」

「ああ？ 私？ 私はちょっとね。」

「ふーん。ちょっとつて？」

「え？ ああ、友達とね。買い物しに……」

「へへ、買い物ねえ……誰ど？」

「ショット 小学校からの友達と……。」

「ふーん。」

「あつ 時間が。じゃあ、私行くから。」

アズナはキハクたちに手を振り走ってこの場から去つていった。
サクラは彼女の姿が見えなくなると腕を組み一人考え方をしている。
「なんか、おかしいな……」と呟きながら首をかしげていた。

「どうかしたのか？ サクラ。」

「うーん、アズナが変なのね。」

「変つて、どこが？」

「えー、だつてあの服装！－！アズナだよ！－？あのアズナがオシャレ
してゐるんだよ！－？」

「あ……ああ。 そ、うか？ 出かけるつて、やつこいつものじゅ……」

「それは、そ、うだけど、アズナの場合は違うの。 勉強できればオッケー、バレー部。 服に、関心は全くない。 そのアズナが……これは何がある！ 行くよ。 キハク！」

「行くつて、おい、荷物どうするんだよ！？」

「そんなものの、どうでもいい！ 今はアズナ！」

キハクの右腕をつかみ無理やりサクラは彼をアズミの行った方向へ連れ出した。

重たいビニールがキハクの足にひっかかり容赦なく連續打撃を与えるがそんなことサクラは気に留めることはない。

この少女はいつたいどのくらいキハクに迷惑かければ気が済むのだろうか。

「キハク、早く！！」

「待て待て、俺、荷物持つてるから無理だ！！」

「無理言わない！ほら、行くよー。」

「あー、もう。分かつたからさう少しゆっくり……」

「そんなんだ、アズナ見失っちゃうよ。」

辺りはすっかり暗くなっている。キハクはサクラの指令のもとサクラと共に同級生の沢井安須奈を追跡していた。キハクとしてはアズナがこのままどこか行き消え見失いサクラが諦め帰宅するという状況に期待していたが残念ながら田の先には彼女の存在がある。また電信柱の陰に隠れ彼女を見ている自分の姿が情けなくて仕方なかつた。それでもサクラに逆らうことしないキハクの優しさは残酷この上ない。

「キハクうー。アズナがあの角を曲がったってことは、やっぱり駅方面かな？」

「ああ、そうだろ。沢井さんが言つ通り友達に会つんじやないのか？」

「いや、何かあるだ……たぶん……。そうだね～やっぱ男とか？」

「そこを俺に聞かれてもな。分かるわけないだろ。」

「サクラのカンだと……それなのだ！――！」

「それなのだつてよく言い切れるな……」

キハクはサクラという迷惑極まりない存在にあきれる他がない。そんな彼女が動いたと思えばまた別の電柱に影を潜める。周囲から見れば変態中の変態だ。電柱と電柱の間をサクラという女子高生が忍者の如く駆け巡る。これがかの有名なストーカーってヤツであるのか。しかし後ろからその姿を見るキハクは思った。かえつて目立つのだと。キハクは隠れることを忘れ逆に心のうちにサクラにもうやめてくれと叫んだ。何故か？ここは人に賑う街の中心部なのだから。人々の視線がサクラに集まる。誰かが怪しい奴がいると警察に通報

してしまわなか不安がキハクの中をこみ上げた。が、キハクと一緒に天気に手を振りサクラが合図してきている。

「あー、俺か……。はーいはーい、今行きます……」

気の抜けた声でキハクはサクラのもとへ行つた。そして誘導されるがままベンチについた。

「見て見てキハク！！」

「なんだ？」

サクラが指差した方向には駅の北口のバスター・ミナル手前で一人立ち姿のアズミだった。周囲をきょろきょろする様子からして誰かを待つているのか？

「キハク、これはもしかしてかもだよ。」

「もしかしてかもだよ、って何語だ。小学校の友人待ちだろ。」

「でも、なんかきょろきょろしているし……」

「まあ、確かに…」

そんな二人は今どこからこの様子を見ているかというと、バスター・ミナルにあるベンチに座った状態でだ。アズナとの距離は正直近い。見つかってもおかしくないのだがサクラは気に留める様子がない。

「ねえ、こー。沢井さんに見つかんない？」

「人がいっぱいいるから大丈夫だつて！！」

「さつきまであんなに隠れることに専念していたのに…」

サクラは今か今かと言わんばかりに一人盛り上がりしている。
そして、ついに時が来た。アズナが手を振る。そしてその先には……

「！！」

「えー？えええええええええええええー？」

信じがたい光景だった。アズナが待っていた人物、今アズミの目の前にいる人物、それはキハクの友人でおじさん臭いと定評の矢口肇ヤグチハジメ

であった。一人は驚愕。サクラは言った。

「いや、これはたまたま今ここで出会つただけで矢口君が通り過ぎていくパターンに違ひない！！」

サクラは呪いをかけるように立ち去れ立ち去れと連呼する。

「あのね……一応つてか普通に矢口は俺の心許せる友の一人なんだけどな。」

「あわわ、そうだけ。立ち去れなんてひどいね、私。」

「ああ、まあ俺も若干願つたけどな……」

「でも、アズナは矢口君とかタイプじゃなさそうだし。」

しかし彼らの予想は完全に裏切られた。アズナと矢口は一人そろつて歩き始めた。

「……」

1

「キハク」

「せいか？」

「追つよー！」

サクラに引っ張られ仕方なくキハクは彼らを追跡することとなつた。追跡というものはキハクにとって非常に気分が悪い。何か犯罪でも犯している気になつてしまふからだ。それに比べ、サクラのこの追跡に対する尋常ではないウキウキ感は何一つ悪気を感じていなさそうにさせる。これがより一層キハクの罪悪感を高めるのだ。

意外な真実

信じがたい事実であった。

キハク、サクラにとつてこの現実は受け入れられない。アズナと矢口はどう見ても不釣り合いなものでお似合いとはとても言い難いのだ。しかし、現に一人は肩を並べて歩き楽しい会話に花を咲かせている。

「キハク、これやつぱり…」

「どうして？」

「ああ。でも、冷静に考えるとこれはこれでありなんじゃないか？」

「恋愛なんかにまったく興味のなさそうな一人が付き合つてゐるっていつのは確かに驚きだけど、一応は高校生…だしな。いうこうのことは高校生活の一貫としては珍しく当たり前のことなんだし。」

「うーん、いいのかなア。」

「いいも悪いもいいに決まつてゐるだろ。ほら。だから、これはこれで解決。もういいだろ。よし、帰るぞ。」

キハクの言つことは確かである。しかしサクラは彼の言つ通り素直に引くだろうか。答えはノ〇だ。

「もう少し後つけてみよう?」

キハクは失望した。

「はい?なぜ?」

「だって、面白そりゃじやん!..!..」

「面白そりゃ…」

キハクは深くため息をついた。純粧に家に帰りたいと思った。そして何よりもこのストーカー行為を早く辞めたいと切実に願った。テンションが下がるキハクに対して上がる一方のサクラ。キハクはこのままサクラを放棄して帰る手段を考えた。今にも破けそうなほどたくさんの中身が入ったスーパーのビニール袋とサクラという変態人物と共にこれ以上付き合う価値などまったくない、ないどころか寧ろマイナスであるとキハクは考えたのである。

「サクラ、俺は帰るよ。」

サクラはキハクの方を振り返り言つた。

「主人のいうことが聞けないのか！」

「このタイミングで主人と言われてもなあ……」

「んじゃ、帰つてもいいよ。でもね、もし私がキハクが帰つた後に敵襲にでも逢つたら？」

「いや……、その可能性はほんとない」と……

「ほんとうにことはちょっとはあるんでしょ？」

「まあ、そういうことだけ……」

キハクはうまく言い返すことができない。サクラの言つことは確かである。しかしそんな事を気にしているようでは生活が成り立たないのだが、キハクの性格上友人に対し反論することはあまり好まないし彼女の意見はもともな意見であるため反論しようとも思わなかつた。サクラは勝ち誇った様子で笑顔で言つた。

「といつ」とでキハク、よろしくね。」

「よろしくか…」

キハクが再びため息をついたが、

「なんだ、お前ら。また会ったな。」

聞き覚えのある声が一人のもとに訪れた。

「あつアズナ！？」

キハクとサクラの目の前にはアズナと矢口が立っている。サクラは驚きを隠せない様子であった。しかし、よく周りを見ると隠れているどころか歩道のど真ん中であった。どうやら言い争いに夢中で隠れることを忘れていたようである。サクラはもはやどうすることもできず、率直にこう言った。

「突然ですが、お二人はどういう関係なのですか！？」

アズナと矢口は顔を見合わせ何のためらいもなく「^{いとこ}従兄妹だけ」
と言つた。

「い・と・こ?」

サクラとキハクは漠然とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0539s/>

神さま『魔法』が大変です！

2011年10月7日17時46分発行